

9 月



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
9月号
No.603

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





暑さを乗り越えて

△表紙の花▽ 櫻子

今年も切りたての新鮮な葡萄ぶどうを送って頂いた。

すぐに食べてしまふのは勿体無くて、撮影してからという事になる。

両親も色んな生り物を花と合わせていた。柏葉紫陽花かしわはあじさいと葡萄、バナナとカラジウムなど上手い組み合わせが沢山あった。

いけてから頂戴するのが桑原家の常でした。

今回はあかのまんまの仲間、大毛蓼おおけりと取り合わせた。葡萄と大毛蓼、同じ季節で同じ場所にいたかもしれない顔見知り同志。暑い夏を元気に乗り越えてきてくれた。

あかのまんまは別名犬蓼いぬたでという。辛みがなく食べられない蓼の意味。犬の字がつく植物には他にも、犬胡麻、犬辛子、犬薺（いぬなすな、犬稗（いぬひえ）、犬蔵（いぬくらび））というものもある。どれもみんな食べられない。

花材 葡萄（葡萄科）

大毛蓼（蓼科）

花器 陶水差し（インドネシア）

雪笹 △2頁の花▽ 櫻子

山野草は中々見る機会が少ない。咲く場所を選び、決まった季節のほんの短い間しか咲かない花は名前も美しいものが多い。

誰がつけたのか、よほど考えられた



のだろう。雪笹も山地の林の中に生えていて初夏の頃花を咲かせる。白い小花を雪に、葉を笹に見たてて、この名前がついた。

花の後は赤くて小さな実ができる。実は小豆に似ていて、葉も湯がいて食べると小豆のような味がするので小豆菜ともいうらしい。

秋の黄葉した雪笹を女郎花おんななはと取り合わせた。

花材 雪笹（百合科）

女郎花（女郎花科）

花器 染付広口花器

お手でまり
大手毬

△3頁の花▽

仙溪

この花の撮影は8月9日で連日の猛暑が続いていた。その3日後には四万十市で41度を観測している。そんな厳しい暑さの中で9月号を撮影していたのだが、比叡山麓の谷間にある畑では大手毬の鉢が紅葉したたのことで、花屋さんが鉢を山から下ろしておいてくれた。

そんな貴重な葉色に優しく寄り添ってくれる花として、橙色の鶏頭けいとうを選んだ。

花器には白と黒のモノトーンの花瓶を選んで繊細な秋色を引き立てている。酷暑の中でも花を飾ると元気になれる。

花材 大手毬すいかずり（忍冬科）

鶏頭けいとう（寛科）

花器 白黒陶花瓶（近藤豊作）



石のような器 仙溪

作例の実のなった枝は花屋ではカリンの名前で売られていたが、カリンの実は緑色で大きくてすべすべな印象があったので調べてみたところ、マルメロではないかと思う。

マルメロは中央アジア原産の落葉高木で、果実は白い細かな毛でおおわれている。カリンと同様に果実には芳香があり、果実酒やジャムにされる。

ツルランは東南アジアから日本（九州南部、南西諸島）、中国、台湾、オーストラリア北部に分布する蘭の仲間。エビネの一種である。

多くのエビネが春に開花するのに対してツルランは夏に開花する。花姿が鶴に似ていることから、ツルランと名づけられ、一般的には白花が多い。広葉樹林下の林床に地生し、群生して咲く。

これら個性的な花材の組み合わせを受け止める器として、石のような青い陶花器を選んだ。文人花的な好みのいけぼな。

花材 マルメロの実（薔薇科）

鶴蘭の赤花（蘭科）

花器 トルコブルー陶花器

【記録】

祇園祭にいける

会期 7月15日(月)～17日(水)

会場 京都四条通

協賛店舗ウインドー

出品 桑原仙溪

「ない藤」履き物店

花材 七竈 檜扇 桔梗二色

鉄線 (写真②)

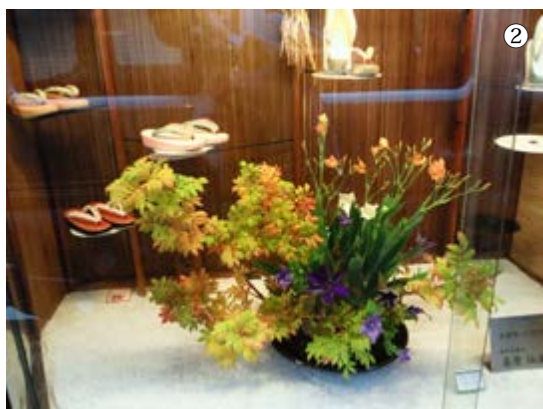
祇園祭山鉾巡行

私の住んでいる町内では、祇園祭の山の一つを管理運営している。山の名前は「浄妙山」。平家物語の宇治川橋合戦の様子を再現した山である。

今年は数年に一度まわってくる行事役で、さまざまな仕事をこなした。合戦縁の以仁王の陵墓へお祭り中の無事祈願を兼ねての墓参もその一つで、千年の時間の流れを実感できる。

7月17日、巡行当日は健一郎、順之助と三人でお供をした。人々の無病息災を祈って。

(写真①)



京都新聞 8月21日朝刊
「くらし塾・食卓を楽しく」
一工夫で普段の食事に彩りを
桑原櫻子

「食卓の花は雰囲気をやかにしてくれるし、卓上をきれいにしようという気持ちを起こさせてくれる」「緑が多いほうがホッとするし、食事もおいしく感じられ



る。花は差し色程度に」「食卓に花はあるほうがずっといい。果物も野菜も花になります」





蓮の立花

8月18日、岡山の上野淳泉先生指導による流枝会「蓮の立花研究会」に参加させていただいた。

まずは早朝5時より手分けして2カ所の蓮田で花と葉を切り、水につけて会場へ移動。専用のポンプで水揚げののち、茎に針金を入れながら立てる。午前11時には全員立て終えて、午前中の鑑賞。

蓮は二人一組になって茎の切り口からポンプで水を送り込んでいけるのだが、水が葉脈に入ってゆく様子がはつきりとわかって面白い。できれば水中にあった部分を残していたほうが水揚げがいいようだ。私の作例でも真の一番背の高い葉が長持ちしていた。

上野先生からは長年の経験で身につけられた蓮の出生について、いろいろと教わる事ができた。いわゆる口伝の部分である。ご自分で見つけられたものもあるとのこと。教わり、身につけ、見つけて、伝える。集い、いけてこそ味わえる体験であった。



立花時勢粧より

貞享五年（一六八八年）刊行の「立花時勢粧」草の部の中の「蓮」について書かれたこと

ろからその一部を紹介しておく。

流枝会研究会では十五瓶の蓮の立花が立てられた。当日撮影した順に掲載します（6〜7頁）。



「立花時勢粧」（1688年）より 蓮一色

一、蓮花は水中出生の物なれば草木に立まぜては池中の景気瓶上にうつらざるゆえ一色物ならでは立る事なし。然れども蓮花一色にて立るを真の一色といひ、水草を立まじゆるを草の一色と云う。

一、蓮に立まぜて苦しからざる物、芦、蒲、つくも、杜若、河骨、一切水草のたぐい之を用ふ。又古来菊を前置に用ゆ。水に縁ある故か。このほか陸物に立まぜる流儀も有といへども花道の正理にあらず。

一、蓮の一色立んとおもはば、自ら池辺へ行きて、開き葉、中ひらき、巻葉、やれ葉、こげ葉、蓮肉、花は赤白、或は茎風流なるを見立て切るべし。



蓮の茎に入れる針金は10番、12番などの太い針金が必要で、長さも1m20cm以上ないと真の葉などは長さが足りない。そのような真っ直ぐの針金は巻きで買って自分で伸ばしてつくることになる。そんな作業もまた楽し。



ビッグイシュー日本版

「生き残りのしくみ」④

父も以前、テキストで書いていたが、花の色にはそれなりの理由があるのだ。先月につづいて「ビッグイシュー日本版21号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。

太陽の光とたたかう

植物は太陽が大好き！と思いがちだが、実際にはまぶしすぎる太陽の光に対しての防御手段もとっているのだ。

「昼間の太陽はだいたい10万ルクスの明るさがあるんですが、光合成する材料となる空気中の二酸化炭素が0.04パーセントしかなくて、せいぜい3万ルクスぐらいしか使えない。残り7万ルクスのエネルギーは行き場がなくなってしまう、酸素と反応して活性酸素が生まれてしまう。」

「植物に紫外線が当たったら、猛毒の活性酸素が生まれます。たとえばオキシドールという消毒液がありますが、あれは過酸化水素水で活性酸素のごく薄い液ですが、それで菌が死ぬ。パラコートという除草剤も、活性酸素で植物を枯らします。」

この猛毒の活性酸素に対抗するために、植物は自分で「抗酸化物質」をつくっている。その代表がビタミンEとビタミンCで、これらが活性

酸素を消してくれる。

また、植物が咲かせる「花」の色も抗酸化物質と関係があるのだ。もちろん受粉のために昆虫や鳥を呼び寄せる目的もあるが、同時に紫外線対策のためでもある。

「植物たちは太陽の紫外線が降りそぐ中で成長し、花は子孫をつくりまわす。花の中で生まれてくる子どもたち、つまりタネを守るため、アントシアニンとカロテンという二大色素を使って活性酸素に対抗しつつ花びらを美しく装っているんです。」これらの二大色素は典型的な抗酸化物質だ。

バラ、アサガオ、シクラメン、サツキツツジなどの花はアントシアニンという色素で装っている。これは赤と青の花を咲かせる。

キク、タンポポ、マリーゴールドなどの花はカロテンという色素で装っている。これは赤や橙、黄色の花を咲かせる。

紫外線が強く、強い光のところで、花の色や果物の色がどんどん濃くなるのも植物の防衛本能のあらわれなのだ。

私たち人間も紫外線に当たったりすることで活性酸素が発生するが、果物や野菜からビタミンCやEをとることで対抗できる。またブルーベリーのアントシアニンは目にいいなど、さまざまな植物の能力の恩恵を受けている。植物の働きぶりに感謝しなければならない。(次号へ)



二種でいける 仙溪

今月の「テキスト」に掲載した8作（蓮の立花をのぞく）はすべて二種の花材でいけている。

普段の稽古では三種類の花材の組み合わせでいけることが多い。主材となる枝に花をとり合わせて、さらに小花をもう一種という感じだ。三種類目の花材で色彩を深めたり補ったりする。あるいは季節感を強めたりもできる。

三種のいけばなが身についてきたら、二種でいけてみるといい。

二種の花材だけでいけようとする、花器の選択が三種よりも難しいと感じるだろう。またいけ方も高度な技量が必要になる。二種でも見応えのあるいけばなにするには相当工夫しないといけない。とてもいい勉強になる。

メギ

仙溪

小さな葉が色づいている枝は目木である。葉の落ちた枝をよく見ていただくと、枝に細く鋭い棘がいつぱいついていいるのがわかると思う。この花をいけたあと、指に棘がささっていた。

目木の枝の動きにあわせて自然体で花瓶にとめ、枝の隙間に黄菊をのぞかせた。かなり前後の奥行きをつくっている。

花材 目木（目木科）

菊（菊科）

花器 トルコブルー陶花瓶

蝦^{えび}蔓^{づる}

櫻子

表紙には大きな葡萄の房をいけたが、こちらには葡萄のような実がぶらさがった野生の蔓をいけた。どちらも太陽が育んだ結実。

この小さな黒い実はエビヅルで、ノブドウやヤマブドウなどとともに古くからエビカズラとも呼ばれ、日本に自生する葡萄の仲間。エビヅルとヤマブドウの実は食べられる。また、古事記にも登場する、日本古来

の植物である。

イザナギノミコトが黄泉^{よみ}の国から逃げ帰る時、追ってきた鬼にエビカズラを投げつけて、鬼がその実を食べている時に難を逃れた。エビヅルに含まれるポリフェ

ノールは普通の葡萄の数倍、酒石酸は血を増やしたり滋養強壮作用があると言われている。鬼もこの実を食べて力が湧くのを知っていたのだろう。

自然の野山は、太古につながる植

物の宝庫だ。

花材 蝦蔓（葡萄科）

紐鶏頭^{ニトリカサ}（罌科）

花器 鶴首陶花瓶（清水正次作）



仙齋リリイ

仙溪

二年前の流展「花を詠む」で父が
つけたガイミアリリイ。父はその前
の流展（2001年）でもこの花で
立花を立てている。

ガイミアリリイはオーストラリア

南東部の沿岸地域に自生する常緑多
年草で、竜舌蘭科。学名ではドリ
ア・エクスセルサと呼ばれ、槍の
花という意味がある。

1mほどの剣のような硬い葉が放
射状に出て、その中心から春と夏に
最高6mの花茎を真っ直ぐのぼした

先に花をつける。

二度、流展で父のためにこの花を
集めてくれた花屋さんが、初盆のお
供えにと持って来てくれた。

とにかく背が高く、茎が太い。ま
で魔法使いが持つ杖である。この
花の力で世の中の理不尽をすべて

解決できそうなくらいの存在感であ
る。天国の父もこの花を持って立ち
嬉しそうに笑っているだろう。

ピラミッドアジサイをとり合わせ
て、とっておきの花器につけた。こ
の花器ならガイミアリリイの重量も
大丈夫。数日後に密をたっぷり溜め

た数輪の花が咲いた。

花材 ガイミアリリイ

（竜舌蘭科）

ピラミッドアジサイ

（紫陽花科）

花器 細口陶花瓶

（宇野仁松作）





木の器

桜子

マンゴーの木をくりぬいて作られた器。タイでつくられたものだ。マンゴーは漆科の常緑高木で樹高40m以上にもなるそう。あの赤い実を無数にぶら下げた大木は圧巻だろう。ぜひ一度見てみたいが、開花後には強烈な腐敗臭がすることなので、実ばかりになった頃合いを調べてからがいいだろう。

マンゴーの原産地はインドからインドシナ半島周辺と推定されている。インドでは四千年以上前から栽培が始まっており、仏教の経典にもその名が見られる。マンゴーをよく食べるようになった現代の若者（10～20代）世代をマンゴー世代と呼ぶそうだが、その名にあやかってマンゴーのように遅しく、たわなに美果をのらせてほしいと切に願う。

そんなマンゴーの幹をくりぬいて作られた器に、深紅の毬栗のようなベニノキと黄金色のマリーゴールドをいけた。麻で織ったオレンジ色の敷物に飾ってタイ風供花といったところか。マンゴーの大木を想像しながら見ると、趣も増してくる。ちよつと高いが、真っ赤なマンゴーも買つてみようか。

花材 マリーゴールド（菊科）

メキシコ原産

紅の木（紅の木科）

熱帯アメリカ原産

花器 マンゴー製鉢

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2014 年

9 月号

No.615

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





若杉ばあちゃん

「若杉ばあちゃん」の書いた本が静かなブームになっている。数日前から、そのうちの三冊を買って読み始めている。私自身、年初に「温故知新」を唱えていたので、日本人の昔からの知恵が詰まっていそうな気がして興味がわいたのだ。

「秋茄子は嫁に食わずな」ということわざの本当の意味をご存知だろうか。「家の子孫を産む嫁を思つて、食べさせたくない」からで、秋の茄子を食べると流産しやすくなることを昔の人は知っていた。

若杉友子さんはそのことを食材の陰陽で説明している。

茄子は陰性で拡散する力が強いので、食べると子宮が冷えてゆるむ。とくに秋茄子は陰性が強まるということ。

陰性は体の中心から外へにげていくエネルギーで、陽性は逆に体の中心に集まる求心のエネルギー。陰性の食べ物は体を冷やし、陽性の食べ物は元氣が出る。食べ物に含まれる、陰性のカリウムと、陽性のナトリウムの割合を知ること。

昔の日本人の食生活は、もともと陰性である野菜を火や調味料で陽性にして食べ、季節の変化や体調にあわせて陰性と陽性の食べ物をバランス良く摂ってきた。野草の効用も大きい。肉を食べなくても強靱な体をつくれたのだ。そしてお米は陰陽を併せ持つ元氣の源。味噌はそんな家の宝物。

お伝えしたいことが多すぎるので、皆さんも是非ご自分で読んでみてほしい。

若杉さんは今の日本を嘆いている。日本人一人ひとりが口と心の「食い改め」をするべきだと云われている。

良い師匠に出会えたことに感謝。これからの私たちにとって、本当に大切なことを、若杉ばあちゃんはなんとかして伝えようとしている。



山の風情 △表紙の花▽ 櫻子

山地の夜風の冷たさに色付き始めた七竈。夏の名残の高砂百合と、弾けはじめた山芍薬の実、山野草の鉢植で売られていた田村草といっしょに水盤に低く広がるようにいけてみた。水際に見えている七竈は、かなり前へ張り出している。器に水をはると、草木がほっとした表情を見せてくれる。

花材 七竈（薔薇科） 高砂百合（百合科）
山芍薬の実（牡丹科） 田村草（菊科）
花器 黒化模様水盤

秋色のアンス △2頁の花▽ 櫻子

丸葉の木が秋色に色付きはじめた、かと錯覚するが、これはアンスリウムで、みんな少しづつ色が違う。季節の草花とあわせてみるとまさに秋の風情。「花の色は、こだわりをもつて生かす。」ことができるかどうか鍵になる。

花材 三島紫胡（芹科） 黒禪（桐科）
アンスリウム（里芋科）
花器 手付陶花瓶

村里の風景 △3頁の花▽ 仙溪

桐の実とはかく重たい。花器ごとひっくり返らないように、前後左右のバランスを考えていける。昔は女の子が生まれると、桐の苗木を五本植え嫁入に簞笥・琴・下駄を作ったとか。「桐の木は村の娘と同一年」。里で馴染みの鶏頭と、里芋の葉をとりあわせた。

花材 桐の実（桐科） 鶏頭（莧科）
里芋の葉（里芋科）
花器 紺色釉花器



花と葡萄

桜子

花屋さんに一輪だけ柳蘭やなぎらんが残っていた。

背が高くピンクの濃い色の花なので、とてもよく目立つ。空気のきれいな信州の草原から送られてきたのか。多分近くに咲いていたであろう鬼百合、金水引も一緒にいけたいと思って買って帰った。

岡山から届いた新鮮なもぎたての葡萄とカラルな高原の花。暑さも少し和らいで、秋の気配を感じる。

柳蘭は葉が柳に似ていて、花を蘭にたとえてこう呼ばれる。北米では針葉樹林帯の山火事の跡にこの花が大群落となるので fire weed (火の雑草) と呼ばれている。夏の終わりにには雪のような真っ白な種子が風にのって舞い、それは雪のようにも見えるらしい。多数の種子を作り、風で飛ばし、常に新しく群生できる場所を探す花なのだ。

花材 柳欄(豆科)

鬼百合(百合科)

金水引(薔薇科)

葡萄(マスカット)

花器 陶茶碗 塗盆

両手に花

母、素子は私が家元を襲名した三ヶ月後の八月に亡くなった。あれから十年になる。

七月の祇園祭にあわせて、アキチャン(私の右)とチャコ(私の左)が家に泊まりに来てくれた。大切な母の妹様、二人とも嫁ぐまで暮らし、昔話に花が咲く。

家元の娘としての煌きらびやかさと、夜中までかかって明るる日の二百杯の花材の束をした過酷な日々。苦勞した分、家族の絆ができたこと。いろいろ教わった。

素子母さんへ。櫻子が撮ってくれた三人の写真。届きますように。



立華時勢粧を讀む ⑤

立花秘傳抄 一〇五

「立花時勢粧 上申下」に続く「立花秘傳抄 一〇五」の五巻は、立花の花材解説の三巻と、立花の基本や心得ほかの解説の二巻からなっている。ここでその内容を紹介してゆくにあたり、膨大な量の花材についての解説は後回しにして、巻の順番を変えて、立花の基本や心得から先に紹介したいと思う。

立花秘傳抄 四

七つ枝の事

往昔、花を指し初むるに法式あり。いわゆる心、正心、副、請、見越、流枝、前置（胴 控枝これを除く）これを七つ枝と名付く。その理に至りては、最上の秘傳にして、世に知る人まれなり。然るに近世、説々まちまちなりといえども、正理にかなわず。その詞にいわく、万物皆陰陽五行より、出すという事なし。まして草木出生陰陽五行の七つを離れず。さるによつて、七つと極めたりと云うは、天文家の謂なり。或いは遠くこれをいえば、千早振る神国 天の七代を

かたどりて我朝の翫びなりといえるは、神社宮司の詞なり。又易に曰く、七つは少陽 艮の卦にして、万物終わり始まるの数なりと云うは、儒者の譬なり。広くこれをいわば、仏出世して法を説き、浄土を莊嚴し、行をなし、作善を勤め、忌日を弔うに、皆七つの数をもつてす。さるによつて、立花は第一の手向けなりと云うは、釈氏の説なり。これ皆諸道の七つをかりて、立花の七つに對用したる物なり。いまだ知らず、別に花道の上に、七つの理あり事あり。能々工

夫をなし、師に尋ねてこれを明きらめずんば、立花に自由を得る事。努々、あるべからざるものなり。



②



③



①
七つ枝が図で示されている。直心の場合、正心とは言わず「心隠」と呼んだ。
②③
立花道具の図。針金や水抜き器の器具（左上）も使われていたのがわかる。

対の花真行草の事

極真ごくしんの対の花は、若松わかしんの直心すくしん立てなり。
指し合い法度を選び、祝言しゅげんの意得せんよう専要せんようなり。
一方、伊吹いぶきの胴わに椿つばきの前まへ置おけならば、一方は
枇杷びわの胴わにつげの前まへ置おけなどかえるなり。
その他、心、正心、副、請、見越、流枝は、
両瓶ともに同木同草にして、木つき枝ぶり
花形よく似るように指すを、真の対と云
なり。

行ぎょうの対と云うは、心こころは笠松のきしんの除心のきしんなり。
これも胴、前置の二所をかえて、残りの大
枝は、同じように指すべきなり。

草そうの対と云うは、心こころ二方松ふかしょうの直心すくしん、一方竹心たけこころ。
松と椿、桃と柳、松の一色と竹心たけこころ。鶏頭けいとうと竹心たけこころ。
右の外いろいろに心をかえ、正心、副、請、
流枝五つの内にて、三所ばかりにて、対す
るを草そうと云う。残りの枝、同じからぬよう
に立てるなり。この三対、古来の法式なり。



第八十図

第七十九図

立花時勢粧下 秘曲の図より

第七十九図

左真の対の花 桑原正栄
松 柳 梅 伊吹 椿 柘植
水仙 熊笹 枇杷 檜

第八十図

右真の対の花 富春軒
松 柳 梅 檜 柘植 伊吹
水仙 椿 熊笹 嫩 枇杷 榎木

第八十一図

左行の対の花 中川常意
松 山吹 躑躅 杜若 椿 伊吹
小羊歯 小菊 要 檜扇 柘植

第八十二図

右行の対の花 高橋吉兵衛
松 山吹 躑躅 杜若 柘植
熊笹 小菊 要 柏 檜扇

第八十三図

左草の対の花 寺田八郎兵衛
檜 苔 梅擬 松 菊 小菊
熊笹 柘植 嫩 檜扇

第八十四図

右草の対の花 寺田清兵衛
松 苔 梅擬 鶏頭 夏櫨 菊
小菊 杜若 榎木 枇杷



第八十二図



第八十一図



第八十四図



第八十三図

岡山県本部研修会

会期 7月27日(日)

会場 倉敷市民会館

指導 桑原仙溪 桑原櫻子

参加 120名

生花の部 74名

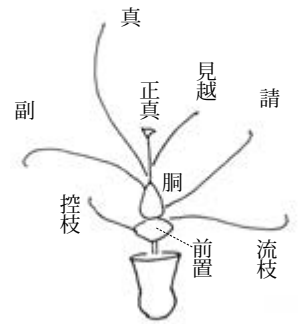
盛花の部 46名

全員対象の講習では立花、生花、

投入、盛花の実作と「いけばなの真行草」についてお話した。

雪柳の立花 行の行形

雪柳(真・副・見越・流枝・前置)
檜扇(請・控枝、女郎花(見越)、
菊(正真ほか)、九蓋草(胴)、
晒木(胴ほか)、姫百合、撫子。



レモンくん、木に登る。



栗 菊

〆10頁の花〆 仙溪

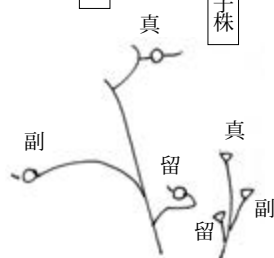
花型 生花株分け

主株 栗 (山毛櫨科)

子株 菊 (菊科)

花器 焦茶釉水盤

主株



夏櫨

仙翁花

〆11頁の花〆 仙溪

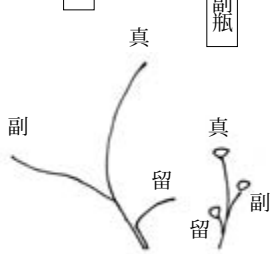
花型 生花二瓶飾り

主瓶 夏櫨 (躑躅科)

副瓶 仙翁・仙翁花 (撫子科)

花器 陶花瓶 平茶碗

主瓶







出合い花（12）

仙溪

波布草

葉鶏頭

はぶ茶と呼ばれるお茶がある。

エビスグサの種子からつくられたお茶で、眼精疲労・胃弱・便秘に効果があるとされる健康茶のことで、エビスグサの種子は漢方でケツメイシと呼ばれる。

このはぶ茶はもともとエビスグサと同属（センナ属）のハブソウの種子からつくられていた。

波布草は北アメリカ南部から熱帯アメリカ原産の一年草。日本には江戸時代にハブなどの毒蛇や毒虫に咬まれたときの民間薬としてやってきた。

エビスグサとよく似るが、豆の莢が上向きにつくことと、葉の先が尖ることで見分けがつく。

そんな波布草の黄色い花と緑色の葉に、熱帯アジア原産のハゲイトウをとりあわせた。

来歴や原産地を知らずに、直感をたよりに選んだ花だったが、同じ熱い土地で育つ花同士、互いに通じ合うものがあるようだ。葉鶏頭も元になるヒユは若い葉と茎が食用になる。人と植物の関わり。その歴史をもっと知りたくなった。

花材 波布草（豆科）

葉鶏頭（莧科）

花器 灰釉一輪挿

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
9 月号
No. 627

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





竹と月と人といけばな

岡山の夏の研修会では、かぐや姫の物語をイメージして舞台に花をいけた。(8〜9頁に関連記事)

「竹取物語」は日本最古の物語と云われているが、かぐや姫が竹から生まれたことと、最後に月へ帰るという奇想天外なストーリーからは、「自然回帰」というテーマを感じる。

富や権力からの誘いをかたく断りつつけるかぐや姫……。そういえば、中国にそんな話があった。紀元頃の厳光(げんこう)の逸話だ。後漢の皇帝となった旧友光武帝からの手厚い誘いを一蹴し、富春山で自然に囲まれた無欲恬淡(むよくてんだん)の暮らしを貫いた。

厳光のように、山里で畑を耕し、富春江に釣り糸を垂れる、そういう自然な営みこそ尊いこととわかっていても、人は私利私欲を捨て去れないがゆえに、現実には混沌としていくものだ。そんなメッセージがこめられているのかも。

ともあれ、竹と月を印象的に扱っている点で、竹取物語は鮮やかに際立っている。竹と月に象徴された「自然」と、人の営みとを対峙させる。そんな着想があったのではないだろうか。

私達は竹や月と人との関わりをどれだけ知っているだろう。竹細工は化学製品に替わり、月の暦を使わなくなつて久しい。人と自然の繋がりを感じてるアンテナを無くしてしまっそうだ。そんなアンテナを育てることも、いけばなの役割だと思う。



紅満作と白い蘭

〈表紙の花〉 桜子

徳島県内の洋蘭園でつくられた新品種。東洋的な風情を感じたので、季節の枝と合わせてみた。花器の銀彩と白い蘭、金彩と葉の色づきがそれぞれ調和してくれた。

花材 丸葉の木・紅満作（満作科）

蘭「ホワイト・フェアリー」（蘭科）

鶏頭（莧科）

花器 黒地金銀彩陶花器

七竈と藤袴

〈2頁の花〉 仙溪

自然の色彩のなんと美しいことか。紅葉花材を手にするようこびは、この季節ならではのものだ。黄、橙、赤が重なり合い、広がって行く。色の切れ間に、藤袴を香らせた。

花材 七竈（薔薇科）

藤袴（菊科）

花器 紺色釉陶花瓶

柴栗と鉄砲百合

〈3頁の花〉 櫻子

「美白」という鉄砲百合は蕾が雪のように白く、不思議な存在感がある。栗の枝を広げ、野の花と挿すと、草木を照らす月光のように見えてきた。

花材 柴栗（山毛櫨科）

鉄砲百合「美白」（百合科）

金水引（薔薇科）

ポリゴナムの赤花（蓼科）

花器 青色釉陶花瓶



七竈の立花

ななかまど

△4頁の花▽

仙溪

花型 立花 除真(行形)

七竈(真・副・見越・請・

流枝・胴)

百合(正心)

木苺(胴・前置)

晒木(控枝)

桔梗二色(あしらい)

花器 天女模様銅花器

山では青々と茂る木の一部分が紅葉していることがある。そんな情景を思い描いて立てた。百合の臘脂色が全体を引き締めている。

刈萱 紫鴨上戸

△5頁の花▽

仙溪

花型 生花 株分け

主株 行型 刈萱(稲科)

子株 草型 紫鴨上戸(茄子科)

花器 脚付角水盤(伊藤典哲作)

珍しく鴨上戸の花と実が切り花で売られていた。丈夫な茎だったのでそのまま剣山にさしている。鴨上戸は白花だが、これは薄紫色をしていた。まだ実は青い。以前山道で見つけたことがあるが、山の冷たい空気の中で赤く色づいた丸い実は、宝石のように美しかった。

黄色くなりかけた刈萱は、ざつくりと生花のバランスにおさめ、子株の長く下がった副に対して、主株の真には厚みをつけている。



立花秘傳抄 五

地取の事

一株の地取は左右かたよりなく、前を広く後をせまく取るべし。一株の鉢あまりというは花形の図にこれあり。

二株は鉢の足の外つらを定法にして、株を立てべきと云えり。然れども鉢に替わりある時は、一応にさだめがたし。

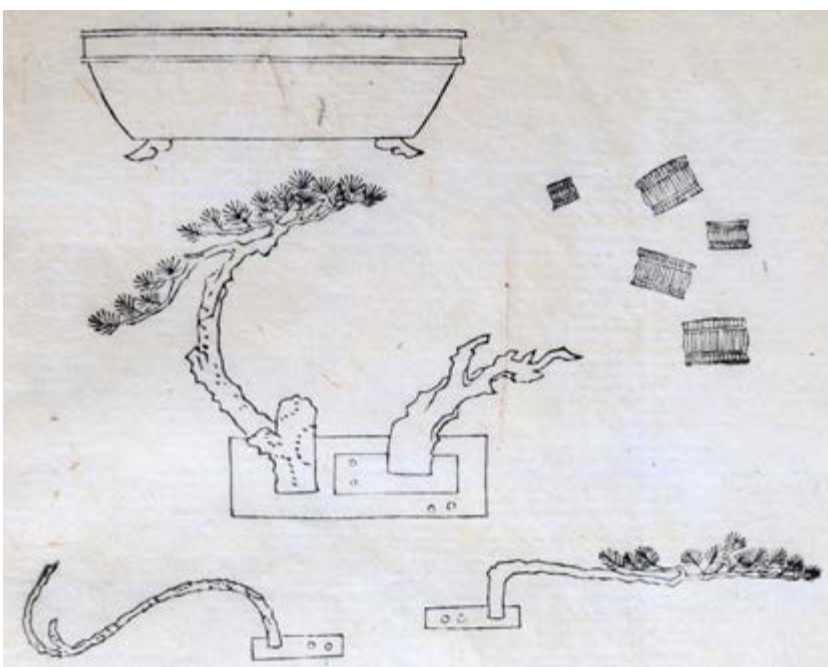
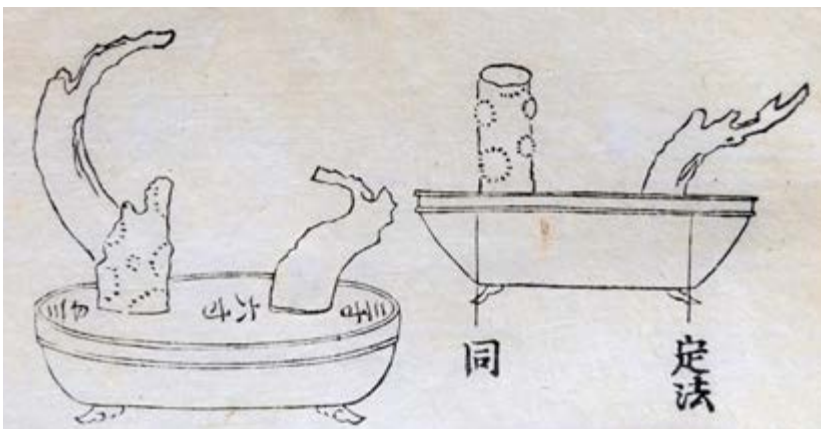
鉢の横ふちより、株までの間、両方三寸あける時は、中のあき六寸あけてよし。株大小ありて、中のあき片せば有時は、水ぎわのあしらいにて、等分に立てなおすべし。かならず両方のあき不同なきように立てるをよしとす。

床正面あかりならば、流枝の方を少し奥へ入れて株を立てつべし。口伝。

床横あかりならば、いづれにても明かりの方の株を奥へ入れて立つべし。口伝。

古代の地取は、下子板げすいた一枚、両株共に、上よ

りかすがいにて打ち付けるにより、地取自由ならず。このごろは鉢の底の広さ二尺ある時は、下子板一尺七八寸などに切り、男株を立てんとおもう所に墨打をして株をすえ、板のうらより釘を二所ばかり打ち付けるなり。女株はまた別



の板の小さきに右の如く打ちつけ、男株の板の上へ女株の板を重ね、自由自在にゆづり合い、地取り片よりなきように取り組み、さて上の板より下の板へ釘を二三ばかり打つなり。流枝、控枝も同所なり。また株へそのまま打ちつけてもよし。

およそ込こみの高さは鉢の口より、六分ほど下に、並ぶべし。砂の厚さ三分、水の深さ三分ばかり。さりながら水の深きは涼しげなし。

込は鉢中に高低たかびくなく、一面に押し合わせ、すこしもすきまなく、さて砂を入れ水を入れて、下木下草をさすべきなり。

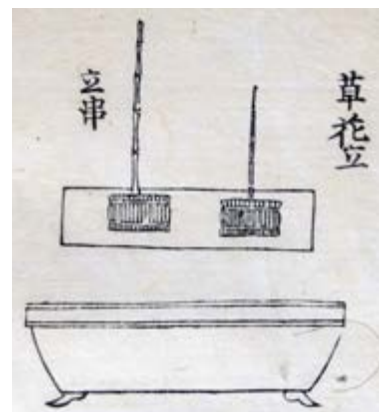
株の前後、草木しげくさす所は、大きな込の堅からず柔らかならざるを、株へ引き付けておくべし。又砂の物に盆石を立てまぜる事。古来よりの法度はつとなり。

草花の砂の物は、地取りを能くして、込を大

きに結び、その真ん中に立串を強く立て、重き草は串に結びつけ、軽き草は込に指すなり。

違棚の下したの砂の物は棚のくみようにしたが、い、心の梢を棚下したの間あきの方へ入れ、棚板の角へ枝葉さわらざるようによけて指すべし。上下左右前後物にあたらず、ゆるやかなるをよしとす。

大砂の物、三間四間は、松、檜、柏樹、梅、水木などの大木を用ゆといえど、五間七間に至りては松の一角ならでは成しがたし。取り組みよう図のごとし。小道具は心、請の幹へ打ちつける。砂は板を敷いてその上に蒔まくなり。



花フオーラム（in倉敷）

竹取物語

櫻子

今日は皆さんをいけばなで竹取物語の世界へお連れしたいと思います。

「竹取物語」は文章というよりも、絵としておぼえていらっしゃる方が多いのではないのでしょうか？

最初の竹林の中で翁がパールと光る竹を見つける場面。

クライマックスの、月の世界の御使いが降りてきて、かぐや姫がのぼっていく場面。絢爛豪華。にしき絵のような。印象に残りますよね。

子供のころ絵本で読んで、その美しい場面にほれほれしたという方も多いのではないのでしょうか。

今舞台では竹の大きな提灯にグロリオーサのあかりが灯つていきます。百合の仲間の花ですが、まるでかがり火のように舞台を照らししてくれます。

そして竹林には夏の美しいもみじが生けられています。

緑の濃淡、波打つ竹林の美しさ。風を感じるように。竹林に翁が入って行く様子を皆さんにも感じていただきたく思います。

桑原専慶流にも竹の翁のような方が居て、綺麗なこの竹を切ってきてくださいました。竹をいつも大切に扱っておられるので、こんな提灯の形や窓の開いた竹を作る事が出来るのだと思います。いつも本当にありがとうございます。

「竹取物語」は、仮名文字で書かれた日本最古の物語といわれます。

成立は9世紀終わりから10世紀はじめとされますが、正確な成立年も作者も、わかっていません。

ただし漢文や和歌や仏教の知識がないと書けない文章ですから、作者はかなり身分の高い教養人であろうと思われまふ。

また、かぐや姫が帝の求婚をはねのけてしまうなど反体制的な内容が強いことから、当時権力を握っていた藤原氏方の人間ではなく、たとえば僧侶などではなかったかと推測されています。

「竹取物語」のお話は大きく三部に分かれます。

第一部では、翁が山奥でかぐや姫を見つけ、育てる。3か月で大きくなって、きれいな娘さんになるところまで。

第二部は、貴族たちの求婚です。なんと美しい、私と結婚してください。

無理難題を押し付けられます。無理難題を押し付けられた貴族たち、ある者は二セモノを作らせ、ある者は金にまかせて中国の商人から取り寄せ、ある者は途中で懲りてぼっぽり出し…

いずれもうまくいかず、結婚はできません。第三部では、いよいよかぐや姫の

うわさが帝の耳に届きます。

そんなに美しい娘がいるのか。ぜひ妻に迎えたいといってくる。しかし、かぐや姫は帝の求婚も拒否。

最後は御使いが迎えに来て、かぐや姫は昇天し、月の世界に帰って行くという、おなじみの筋書きです。

今舞台の中央では翁が白く輝く竹を見つけた時の情景をシマアシとダンチクで印象的に表現しています。

翁は野や山に出かけては竹を取ってきて色んな道具を作っていました。

筥、竿、箆、籠、筆、箱、筒、簞、箆、皆さん、お気づきでしょうか。これらの漢字は全て竹かんむりの字です。今日演奏して下さっている争も竹かんむりがついています。竹と縁が深いのです。

それ程竹を熟知して大切にしていた翁だからこそ、かぐや姫に出逢えたのだと思います。

「源氏物語」には「竹取物語」の影響が強くうかがえます。源氏物語は平安時代半ばに書かれた物語です。

「源氏物語」17帖「絵合」の章では、竹取物語について語られています。

どんな風に語られているのでしょうか？そしてどんな場面でしょうか？絵合わせとは、宮中のお遊びとして左右のチームに分かれて、互いに

絵を見せあいます。平安時代に貴族の間でおこなわれました。そして優秀を競うわけです。

冷泉帝は絵を好み梅壺の女御の絵を愛好しました。梅壺の女御とは、光源氏の養女で冷泉帝の寵愛を受けておられますが、先に女御としておられた権中納言の娘の弘徽殿の女御もライバルです。帝の寵愛は、どちらも甲乙つけ難いのです。

親である光源氏と権中納言の見守る中、両陣営による帝の前での絵合わせが行われました。

その場面に「竹取物語」の絵巻物が出てきます。

「物語の出で来はじめの祖なる『竹取の翁』」と紹介されます。

唐錦の縁がつけられてあつて、赤紫の表紙、紫檀の軸で上品な絵巻物です。

絵巻物を鑑賞しながら互いが批評しあいます。ちょっと意地悪な感じ。お聞きください。

「竹取の老人と同じように古くなった小説ではあつても、思いあがった主人公の赫耶姫の性格に人間の理想の最高のものが暗示されていてよいのです。卑近（俗っぽい事）なことばかりがおもしろい人にはわからないでしょうが」

とある方が言われますと、別の方が、「赫耶姫ののぼった天の世界というのは空想で作られたものです。この世の生活の写しであるところはあまりに庶民的すぎて美しいものではありません。

ありません。貴族は多く出てくるのに宮廷の描写などはすこしもないではありませんか。赫耶姫は竹取の翁の一つの家を照すだけの光しかなかったようですね。貴族の若者が大金で買った毛皮がめらめらと焼けたと書いてあったり、にせ物をもって来てごまかそうとしたりと不愉快な事ばかりです。」

こんな事を言い合いながらいつまでも中々勝負が決まりません。

結局最後は光源氏の出した絵に誰もが息を飲みました。須磨の風景が描かれたその絵には、源氏が過こした佐び住まいや海の様子が余す所なく表され、趣深い歌まで添えられていた。

それまでに出された絵のことは全て忘れ去り、人々は、この絵に心を奪われてしまいます。

絵合わせは、光源氏の勝利となり、敗れた権中納言は、娘に対する帝の寵愛が損なわれるのではないかと危惧するのであります。

千年以上前に書かれた長編小説の源氏物語にもこのような形で現れています。

こんな風に竹取物語はその後の日本文学にも大きな影響を与えています。皆さんにもかぐや姫が見えてこられましたか？…輝く光のようなものが見えてこられましたでしょうか



岡山県本部主催 花フォーラム
 花 HANA 音 OTO コラボレーション
 会期・・・7月12日(日) 会場・・・ライフパーク倉敷
 花・・・桑原仙溪・桑原櫻子 箏曲・・・山路みほ
 入場者・・・260名 公開いけばな教室・・・20名





オクラとパニカム

〈10頁の花〉 櫻子

オクラはアフリカ原産の多年草だが、寒さに弱いため日本では一年草として栽培される。ちなみにオクラは英名。パニカムは黍属につけられた名前、アメリカ原産のいくつもの品種が切り花になっている。脇役としてとり合わせに加えると、季節の風情が深まる感じがする。

赤いオクラをパニカムの中に立てると、優しい表情になってくれた。

花材 オクラ（葵科）

パニカム（稲科）

薔薇「カルピデューム」

（薔薇科）

花器 トルコブルー手付陶花器

蔓梅擬と鶏頭

〈11頁の花〉 仙溪

器の装飾はシンプルなものを選んで使っている。例えば白黒とか。そして模様があるとするなら、自然をモチーフにしつつ、抽象的なデザインの方が花をいけやすい。

雨上がりの庭。蜘蛛の糸に水滴がいつぱいついていいることがある。作例の花器のデザインはまさにそんな感じだ。自然の輝きを感じる器は、いけばなの趣を深めてくれる。

花材 蔓梅擬（錦木科）

鶏頭二色（寛科）

女郎花（女郎花科）

花器 白黒陶花瓶（近藤豊作）



月の暦と太陽の暦

今年の中秋の名月は9月27日だそうだ。ちなみに来年は9月15日、再来年は10月4日と年によって違う。旧暦の8月15日が新暦のいつに当たるかということ。

現在の太陽暦に代わる前の太陰太陽暦（太陰Ⅱ月）では、月が見えなくなる新月から各月がはじまっていた。なるほど毎月の3日頃には、まさに三日月がでていたことになる。とても分かりやすい。満月は15日頃。

旧暦では7、8、9月が秋なので、中秋すなわち8月の満月を中秋の名月と呼ぶ。8月15日の月を十五夜、9月13日の月を十三夜と呼んで、どちらも月見をして月に供え物をしていた。十五夜は芋名月、十三夜は栗名月、豆名月とも呼ばれる。

一方で、太陽黄経の角度を元にした二十四節気もあって、秋分の日はその一つ。旧暦では毎年日が変わり、新暦では毎年ほぼ同じ日になっている。

さて旧暦と新暦を比べると、旧暦のほうが自然に添った暮らしができそうな気がするがどうだろう。作物の収穫も月の満ち欠けにあわせていたと聞く。そのあたりのことを一度調べて書いてみたい。

出逢い花（22）

仙溪

山芍薬の実（牡丹科）
からまつそう

唐松草（金鳳花科）
まんぼろけ

どちらも山の宝ともいふべき植物。強烈な印象の山芍薬の実に、粉雪のような繊細さを感じる唐松草。谷川の水流のような造形の花器に挿すと、奥山へ通じる秘密の扉が開いて、向こうから微風が吹いてきた。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
9 月号
No.639

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





月桃
げつとう

へ2頁の花▽ 櫻子

花材 月桃 (生薑科)

薔薇2種 (薔薇科)

ミリオクラダス (百合科)

花器 赤色釉花器

ゲットウの実を見てキャンディを想像する人は多いと思う。とても不思議な形をしている。去年の6月初旬、屋久島でゲットウの花に出逢った。白い蕾の先がほんのり赤くて、中国絵画に出てくる桃が頭に浮かんできた。

月桃という名前も不思議な名前だ。なぜ月なのだろう。

沖縄ではゲットウの葉で餅を包んで蒸したムーチャーという菓子がある。葉の良い香りがするそうだ。いつか食べてみたい。

右・フイリゲットウの蕾

左・ゲットウの花 (屋久島にて)





真主型の花

△ 3頁の花▽

櫻子

花材

唐胡麻（燈台草科）
鳥兜（胡麻の葉草科）

岡虎の尾（桜草科）

花器

青色釉花器

トウゴマ、ニューサイラン、トクサは真主型の花として小さい頃からよくお稽古した花で馴染み深い。子どもでも切りやすく挿しやすいからだろう。

トウゴマは長く直立した形にいられることが多い。赤い茎や実が目立つようにかもしれないが、短く前に倒す形も軽やかで、葉を支える赤い茎が細くても力強いのがよくわかる。ヤツデに似た形の葉の葉脈も赤くて淡緑色を引き立てている。

うしろに高く立てるのではなく、前へ倒す花型。真主型では気がつかなかった姿を見つけた。

彩りを考え、トリカブト、オカトラノオと取り合わせた。



横から見た奥行き



老爺柿ろうやがき

△4頁の花▽

仙溪

花材 老爺柿（柿の木科）

白菊大輪（菊科）

花器 黒釉陶花瓶

ロウヤガキは渋柿で食用には向いていない。原産地は中国。実の形からツクバネガキとも呼ばれる。岡山の先生の庭には、見上げる高さ

にロウヤガキが育っているそうだ。いけばなでは以前からマメガキ（豆柿）が使われることがあったが、近年このロウヤガキも見かけることが多くなってきた。

ロウヤガキは園芸学者の菊池秋雄が中国から持ち帰ったそう。京都植物園とも縁のある菊池先生は青森の出身で、父上は「青森りんこの始祖」と呼ばれる菊池楯衛。

菊池楯衛は津軽藩の武家に生まれたが、花や木が大好きで、明治となつて以降、北海道でアメリカ人の農業技師から果樹栽培の技術を学び、青森がリンゴ栽培に適していると確信してからはリンゴ栽培一直線にすすんだ。それが今の「青森といえ

ばリンゴ」に繋がっている。ロウヤガキを調べていて横道に逸れたが、植物が大好きで、良い木を育てることに情熱をそそいだ人のお蔭で、現在美味しいリンゴを食べることができることに、今更ながら感動している。

囀くような……

△表紙の花▽

櫻子

花材 竹似草（芥子科）

女郎花（女郎花科）

大手蓼（蓼科）

花器 白黒陶花瓶

山の林道脇などの目当たりの良い場所に背高く白っぽい姿で群生するタケニゲサ。

初秋の秋草ととり合わせると、力強い姿で目立つ存在だ。

葉の形も複雑で、裏側が白く、とても柔らかい。ケシ科の毒草なので、鹿にも食べられず伸びやかに育ったようだ。

作例は実の出来た状態でいけているが、カシヤカシヤと静かな音が感じられる。ささやきぐさ「囀草」と呼ばれる所以。

茎が竹のように中空なので「竹似草」。竹と一緒に煮ると竹が柔らかくなり細工しやすくなるので「竹煮草」ともいわれるらしいのですが、本当でしょうか？

横から見た奥行き





レモンちゃん日より
石臼の水溜はお気に入り
の給水所。パトロールの
途中で、大切な水分を
補給しています。

立花秘傳抄 一

常磐木之部 (つづき)

栢樹いかりき

祝言上中下。

苔、晒木付。

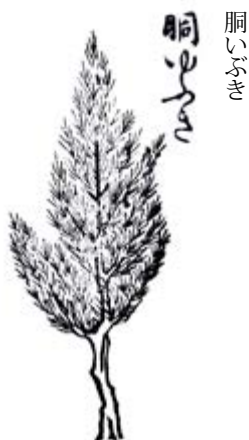
心、副、請、正心、胴、控枝。

(前置に用いず。)

穩栢、圓栢。

禪家に謂、庭前の栢樹子とはこれなるべし。

胴に用いる時、一本は立てず。しかれども景氣二本に見える栢樹ならば苦しからず。



栢樹いかりきとて古来より専ら用い來たるといへども、初学の物にして巧者の好まざるものなり。しかれども花形により珍しき作意も指し出すべし。

玉たま

栢樹いかりき



これを玉栢樹という。胴作りに専ら用い、その形種々替わりありて面白き物なり。好んでつかうべし。

しろいぶき

栢樹いかりき



栢樹いかりき＝栢樹びやくしん、栢樹びやくしん 伊吹のこと。

しろいぶきと名付く、横に出すには細く軽くして、しかも木末きおいてよろしきなり。副、請、正真、つやあしらいなどに専ら用うべし。

栢樹いかりきは高山の物なるゆえ、晒木を用いるに、よく晒て白く、するどなるを用いれば、体用和合して景氣殊更に面白く、図に多くしるすなり。よくよく工夫有るべし。

栢とが

非祝言 上中下

栢はよく苔の付く物なりといへど、古来より苔木こけをやとて付ける事なし。さりながら心しんにても請うけにても自然と苔の付きたる木ならば、又外の苔木こけをやといあしらいても苦しからず。

栢のかれほ流枝、控枝などに面白い物なり。体の付よう専一なり。つかいよう檜と同前なり。非祝言古歌

いささらは茂りあいたる栢の木のととかとしきを立て過さん

柵さかき

祝言 中段

古来より祈禱の花、神前の立花に必ず用いる。

祝言の歌

神代より色もかわらぬ柵葉はさかへとき
はにむかふなりけり

かなめ

祝言 中段

正心に用いるに心得あり。柵 かなめ、わ
くら、しらかしは大木ありといえど、皆若芽



第五十一図

立花 伊吹除真 大橋源七
伊吹 苔木 芍薬 要 栢植
杜若 檉木 小菊 著我



第五十四図

立花 伊吹除真 澤重允衛門
伊吹 栢 桔梗 仙翁花 栢植
木槿 夏はぜ 檜扇

を用いるゆえ、讀、副に用いず。他これになぞらえて知るべし。

わくら

非祝言

中段に用いる。正心にも立てる。この外右に同じ。

しらかし

祝言

中下に用いる。同作り、前置によろし。

かすおしみ

非祝言。仮名を嫌うか。中下。大木ありと

いえども若木を用いるゆえ、たかく指さず。

梅のずわい、さし合いなり。

黄楊

祝言。控枝。流枝にも用いる。水ぎわより遣い上れば、胴までも上る。前置に専ら用いる。つげにほそき苔を用いる。つつじの枝の

苔をかり用いるなり。

和名、豆計。

本草に曰く、黄楊その性、長じ難し、年毎に長すること一寸。又閏歳は長ぜざるのみ。

東坡の詩に云う。園中草木春無數、只黄楊の閏年に厄するあり。

つげ種々あり。伊勢、浅間につげあり。針

なく葉の表に艶ありて、裏に筋あり。秋より

紅葉して、四季凋まず、これを女つげという。

本草綱目の柘は又外にあるべし。(未勘)

黄楊一本は立てず。景氣二本に見える時は苦

しからず。

近代はつげの葉先を美しくはさみ、様々の形

に作りて指す人多し。いったんはきれいなよう

なれども、よく見るに至りては、出生の景氣

にそむき、またはたくみに執著したる作者の心

もあらわれ、後は興ざめて見にくき物なり。た

だ自ずからなるきれいを好みて、きれいをたく

む事なかれと古人も云えり。これは上手になり

ての一重の上の教えなり。

黄楊は立花第一の景物にして、初心巧者のわ
かちなく指し得がたき物なり。まずその形、円
方、長平、木裏、木表、左右、高下、それぞれ
の出生にしたがいて、よく取り合い、木すえ立
ちたるは高くのぼせ、横にひらめな類は下に遣
い、軽きは上に、重きは下に立て、縁遠きは下
草をもつてあしらいかけ、近きは色をきりて遠
く見せ、景氣あり、はづみ有り、浮かず沈まざ
るようにと、心がけ肝要なり。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』(日

本華道社刊)

『花道古書集成 第一期第一巻』(大日本華道界刊

思文閣出版刊)

※立花図転載

『花道古書集成 立華時勢粧』(思文閣出版刊)



縹薄
しますすき

仙溪

花材 縹薄（稲科）
しますすき

鶏頭2色（苺科）
けいとう

吾亦紅（薔薇科）
われもこう

花器 黒赤ガラス花器

ススキは水揚げが難しく、すぐにカリカリに乾燥してしまうが、その中でも比較的よく水を揚げるものにシマススキがある。

白い縹模様が写真にはっきり写るように前方へ数本集めてみた。前方へ張り出す胴主型の花型だが、作例では写真に納めることを考えて、葉が広がりすぎないように苦労した。広い空間にいける時にはおすすめる。

とり合わせたケイトウは頭が大きく、葉が見事なまでに茂っていた。8月初旬にいったのでまたススキの穂が出ていないのが残念だが、ワレモコウを加えると、秋が感じられる。

横から見た奥行き





七竈の立花

仙溪

花材 七竈 (薔薇科)

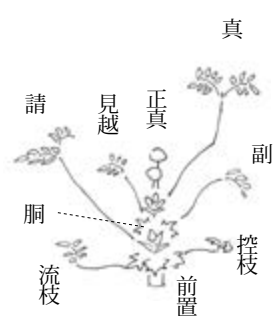
木母 (薔薇科)

鶏頭 (寛科)

竜胆 (竜胆科)

三島紫胡 (芹科)

花器 陶花器 (藤平正文作)



アレカ椰子の生花

仙溪

花材 アレカ椰子 (椰子科)

モンステラ (里芋科)

アンズリウム (里芋科)

花器 八角陶鉢



陰陽五行

「陰気な人」「陽気な人」などと聞くと、陰が悪くて陽が良い、と誤解するかもしれないが、決してそうではなく、すべてのものに役割を見いだす考え方が陰陽のものの考え方だ。違った役割を持つ対極のものの同士が互いに助け合い、新たなものを生み出すという思想。

陰とは、冷たい、暗い、柔らかい、ゆっくり、大きい、精神、女、こういった性質。

相対する陽は、熱い、明るい、硬い、早い、小さい、肉体、男、このような性質を持つて。

これらの性質は絶対的なものではなくて、相対的なものなのだ。

植物と動物では、動かない植物は「陰」で、活発に動き回る動物は「陽」と見ることができる。

植物においても、天（陽）へ向かって成長する部分は「陰」、地（陰）に向かって下降する部分は「陽」というふうに、陰陽の調和でありつつている。

陰は陽を求め、陽は陰を求める。男と女、磁石のN極とS極が引き合うのもこの原理。

調和のとれたいけばなは、陰陽など意識することなく、硬いものと柔らかいもの、伸びるものと集まるものというとり合わせをしている。そんなバランス感覚が、世の中すべてのものに共通して大切なのだと、陰陽を知って改めて思う。





出逢い花（32）

仙溪

ポトスイエロー（里芋科）
パフィオペディルム

（蘭科）

花器 緑釉陶鉢

はじめていけたが、ポトスイエローと呼ばれる葉はとても大きい。詳しくはわからないが、おそらく熱帯や亜熱帯の植物だろう。頑丈な葉は、厳しい太陽の光や強い雨風にも負けない逞しさを感じる。

など見ていたら、今回の出逢い花のイメージが浮かんできた。

お相手には同じく南国の花で、不思議な姿のパフィオペディルムを選んだ。大小の葉と花の組みあわせ。普通のいけ方ではいけにくいけれど、出逢い花にするとちゃんと絵になってくれる。

逞しい葉の下に、ひよっこりと顔を出す森の妖精。器も森のみどりにして、植物の会話を聞き耳を立てる。

横から見た奥行き



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2017 年

9 月号

No. 651

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





草紫陽花^{くさあじさい}

△2頁の花▽

櫻子

花材 草紫陽花（紫陽花科）

ベロニカ・ブルーエirian

（胡麻の葉草科）

ヒペリカム（弟切草科）

花器 通草籠^{あけびかご}

クサアジサイはアジサイの仲間だが、アジサイより少し遅れて7月～9月に咲く。アジサイと比べて茎が細く、葉も薄くて細長い。やや湿った林に生える山野草だ。花は白または淡紅色。最初白花でも、やがて淡紅色に変化するものも多いそうだ。あまり保ちの良い花ではないが、自然の風情がある。中央の両性花が結実する秋頃にもいけてみたい。ルリトラノオを小さくしたようなベロニカ・ブルーエirianと、キンシバイの仲間のヒペリカムの実をとり合わせて、少し素朴な籠花にしてみた。

通草^{あけび}の蔓で編まれていて、お買い物籠にも花籠にも使っている。



横から見た奥行き



姫檜扇ひめひおうぎ（姫檜扇水仙ひめひおうぎすいせん）の実
 〓 3頁の花 〓 仙溪

花材 小鬼百合こおにゆり（百合科）
 姫檜扇の実ひめひおうぎ（菖蒲科）

スプレー菊はれもこう（菊科）
 吾亦紅われもこう（薔薇科）

花器 竹手付籠

いけばな花材は、古くから変わら
 ずいけられてきたものもあるが、移
 りゆく時代と共に姿を消すものもあ
 る。しかしその一方で、新たに加わ
 るものもあつて、そうした新鮮な出
 逢いによって、いけばなの楽しみも
 深まってゆくのだと思う。

ヒメヒオウギは南アフリカ原産の
 ヒオウギズイセンの園芸交配種で、
 園芸ではクロコスミアもしくはモン
 トブレチアと呼ばれ、人気がある。
 その実が切り花で売られていた。人
 の白歯みたいな形がユニークだ。細
 長い葉が涼しげについている。野の
 花をイメージして添える花を選び、
 籠にいけてみたが、風雅ないけばな
 になった。日本と南アフリカの自然
 の合作。



横から見た奥行き



オリーブの実

櫻子

花材 オリーブ(木犀科)

薔薇(薔薇科)

アンズリウム(里芋科)

花器 彩泥陶ピアジョッキ

(宮下善爾作)

オリーブの実が生った枝は、小さいけれども向いている。いける機会が希な珍しい花材を主役としていける時は、とり合わせる相手の色やボリューム、器との相性に充分に気を配る。

艶やかな明るいグリーンの実と細長く固い濃緑色の葉。セピアがかったピンクのバラを添えると、西洋の香りがする。ダークブルーからモスグリーンへ、4段階の色土でデザインされたピアジョッキに挿すと、オリーブが心地よさそうにしてくれた。さらに軽やかな白のアンズリウムを足す。オリーブの故郷、地中海の光と風を感じる小品花。



横から見た奥行き

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ③7

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

紫楊花あじさい

祝言。中にばかり遣う。

異名、繡毬花しゅうきゅう、紫綉毬ししゅうきゅう、紅綉毬こうしゅうきゅう。

夫木集

あちさいの下葉にすたくほたるをばよひらの数のそふかとぞ見る

あぢさい種々あり。順の和名集には草の部に入りたり。本草綱目には木の部に入りたり。然るに通用物と云う人あれども、詳らかならざる物か。後人こうじん尚これを勘かんえるべし。

あぢさい枝長きは水あげがたく、たむればしおれやすし。茎みぢかきは筒に入れて遣う。

あぢさい大輪なる物なれば、胴作り、前へはり出し、兼ねて座所やしろをこしらえ、花ゆるやかに

おしつからざるように指すべきなり。大輪なる花たぐいの類、いづれもこの意得あるべきことなり。

中唐の詩人・白楽天に紫陽花と題する詩があるが、日本のアジサイとは別の花ではないかとされている。

立花時勢粧に紫陽花は1図のみ。すでに2度紹介したが再度掲載しておく。細く風雅な松しんの真まと流枝ながし。請うけには

枇杷びわ。黄色い百合と青紫色の紫陽花が、枝物と対等なバランスで配されている。要かなめ(要綱かなめちう)の赤い小葉があしらわれて全体が色鮮やかになっている。器の形も優しい。

第十七図 (9頁)

立花 松除真

除心の内行の花形 中流枝立 寺田八郎兵衛
松 晒 百合 枇杷 柘植 紫陽花 要 小菊 檜扇



順の和名集みなものしながた 源順が編纂した和名類聚抄のことか。和名類聚抄に、日本で最初の紫陽花の漢字表記がある。

【記録】

岡山県本部夏季研修会

会期 7月30日(日)

会場 倉敷市民会館

講師 家元 副家元

・檜扇の生花

・季節の投入花

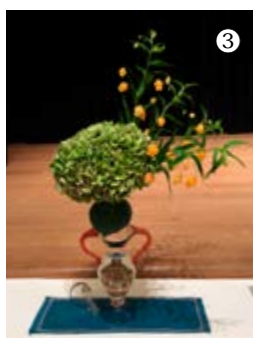
・師範の心得

「学び磨いて生かし伝える」

・夏の花の楽しみ方

受講者 午前午後合計135人

(写真①②③④)



桑原専慶流のいけばな

桑原専慶流は、京都で江戸時代前期に生まれ、三百年以上続く華道の流派です。流祖の桑原富春軒仙溪は、公家や武家、寺院の床飾りとして発展していた立花の名手でした。卓越した知識人で、当時の植物学にも造詣が深く、その学識を存分に駆使して一六八八年(元禄元年)に「立花時勢粧」(全8巻)を出版しました。その中で述べられている花道論は、今日までいけばなに大きな影響を与えています。

流祖は自然を敬う心を何よりも大切に、自らの心眼で美の極みを探り、そこから感受したものを自由闊達に表現しました。秀麗で理知的な気風も特徴です。ただし、本質を見極めなければ、何ものにもとられない本当の自由は得られません。技を磨くだけでは駄目なのです。この道理をしつかりと踏まえて、一人ひとりが自らの奥深くに秘めている個性や創造性を鮮やかに開花させる。それが代々継承し、目指してきた桑原専慶流のいけばなです。

青柿とあかまんま

△表紙の花▽ 仙溪

花材 犬蓼^{いぬたで}（蓼科^{たで}）

青柿（柿科）

花器 掛分陶花瓶（竹内眞三郎作）

まだ青い柿の枝が売られていたの
で、イヌタデをとり合わせて、人里
の趣^{おもむき}にいけてみた。カキの葉は分
厚く重い^{おも}ため、早くにだらしなく下
がつてくるが、光沢のある葉は美し
く、少しの間でも葉と共に楽しみた
い。

カキの葉はビタミンCが豊富で、
ポリフェノールの一種であるタンニ
ンが多く含まれ、抗菌・抗酸化作用
に優れている。すし飯をカキの葉で
包んだ柿の葉寿司は、すし飯を乾燥
から防ぐ以外に保存性を高める効果
があると言われている。

イヌタデはアカマンマとも呼んで
親しまれる。タデのように料理には
使われないが、素朴な里の花として、
身近に生けて風情を楽しみたい。



横から見た奥行き

Takaya Fujii

藤井隆也さんは京都芸大で日本画を学ばれ、ドイツ留学を契機にその伝統的な様式や素材にこだわらない、現代美術のフィールドに活動の領域をひろげてこられた。

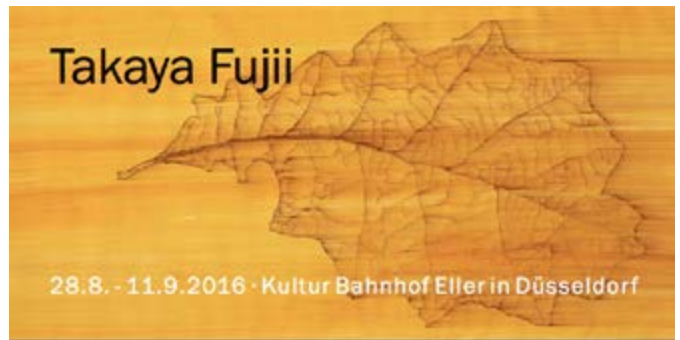
桑原専慶流の師範でもあり、日本の「いけばな」への深い思いを持っておられる。日本、ドイツ、スコットランド、イギリスを歩き来して制作と発表を続けておられるが、昨年と今年には、「いけばな」と深く関わりを持った芸術表現の試みをされた。

昨年デュッセルドルフでの2週間におよぶ展覧会では、262枚の櫛の枯葉を拡大して描いたものが、部屋の壁を埋め尽くし、床に置かれた白い水盤には水が張られて櫛（オーク）の枝が立つ。さらに櫛の実、枯葉、青葉、それぞれを使った印象的な作品が置かれている。

枯葉一枚一枚との対話が絵となり、葉や実の命の輝きに対する藤井さんの感動がオブジェから伝わってくる。そして毎日挿し変えられる生の枝によって、彼の自然との関わりを感じることが出来る。

藤井さんは京都の御室仁和寺の近くに住まいがあり、ここ20年間、日本にいる時はほぼ毎朝、仁和寺の裏山を散歩して、自然の移ろいに目を向けてこられた。

そんな中で、散り椿が人に踏まれ



る前に拾い集めて塩漬けにしたり、柿の紅葉の色彩を氷の塊にしまいこんだりして、朽ちゆく植物の命を作品にとどめてこられた。自然から受けた感動を純粹に自分を通して表現することにこだわっておられるように感じる。

262枚の葉は般若心経の文字数と同じで、藤井さんにとっての写経だそう。海外での修行の先にとんだ芸術世界をこれから作られるのか、そして海外だけでなく日本でも、「いけばな」の心を表現する活動を展開していただきたい。



毎日ドイツの森を歩き、オークの枝を集め、ギャラリーに生ける。藤井さん独自の表現は、いけばなの深奥と繋がる。





出逢い花 (30)

仙溪

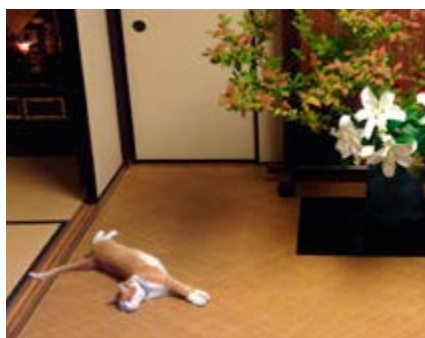
唐胡麻 (燈台草科)
おみなえし
女郎花 (女郎花科)

花器 陶コンボート

紀元前四千年のエジプトの墓から、トウゴマの種子が見つかったというそう。オミナエシは秋の七草の一つ。東西文化の出逢い花というところか。



横から見た奥行き



レモンちゃん
暑い日は網代の上でゴロンと。



七竈の立花 ななかまど

仙溪

花型 立花 行の花形
花材 七竈の紅葉(薔薇科)

雪柳(薔薇科)

木苺(薔薇科)

竜胆二色(竜胆科)

スプレー菊(菊科)

三島紫胡(芹科)

アゲラタム(菊科)

花器 陶花瓶

山では夏に一部分紅葉した枝を見つけたことがあるが、これは病葉と云って、病気や虫によつて弱つた葉が変色したもの。近年、初夏から初秋にかけて赤く色付いたナナカマドの枝が売られるようになったが、病葉の仕組みを利用して、枝を傷めてつくるそうだ。秋の紅葉は葉が枯れやすいが、こちらは長く保つ。

作例では垂れ下がる副のナナカマドと、立ち上る請のリンドウの対比を大切に立てた。



横から見た奥行き



野茨と鶏頭のいばら けいとう

仙溪

花型 生花 株分け

花材 野茨 (薔薇科)

鶏頭 (鳶科)

花器 陶水盤

ノイバラ3本とケイトウ3本で、生花の稽古をした時の見本にいった花。自分で花屋で枝を選ぶと、いけやすい枝を選んでしまうが、稽古の花は花屋が仕入れた中から人数分に分けられたもので、中にはいけにくい枝も混じる。それをなんとかするのもまた楽しい。

野性味のある赤い実には、ケイトウの花色が鮮やかに寄り添い、その瑞々しい葉もなくてはならない存在を感じさせてくれる。

ノイバラは役枝の選択が重要となる。自然の躍動感を大切にして、花型に生かすこと。小枝の整理をどうするか。できるだけ残しつつ、最後に切るべき枝を切る判断も大切だ。手にした枝でベストを目指す。花型は全体のバランスに注意する。水際が美しく、生命感にあふれていること。このことは、どんな生花の場合も大事にしたい。

生花の基本が身についたら、是非とも楽しんでいけてほしい組みあわせである。



赤い葡萄

桜子

花材 アマランサス（苋科）

スモークグラス（稲科）

葡萄3種（葡萄科）

緑 シヤインマスカット

赤 クイーンニーナ

黒 ピオーネ

花器 白ガラス花瓶

高足ガラス皿

今年も待ち遠しい秋が少しずつ近くなってきたようだ。

秋は果物の季節。岡山から頂戴した固くて大きな葡萄は一粒一粒が艶やかで工芸品のような。

新しい品種も実りを迎えた。「クイーンニーナ」という赤い葡萄は、至れり尽くせりで育てられたお姫様のような。もったいなくてすぐには食べられない。いつもの事だが、テキストの写真に納めてからゆっくり楽しみたい。

同系色のアマランサスも岡山育ち。

いつも岡山の恵みをいただき感謝の気持ちを込めていけた花。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
9 月号
No.663

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ギザギザの葉

△表紙の花▽ 仙溪

花材 飛竜羊歯(獅子頭科)
鉄砲百合「美白」(百合科)

クルクマ(生薑科)

花器 陶鉢(市川博一 作)

このギザギザの葉はヒリュウシダの名前で売られていたが、確かな事は分からない。とても繊細な造形だが丈夫で長く保つてくれた。葉の面を前に向けて繁みをつくり、ユリとクルクマを覗かせた。葉に合わせて幾何学模様の器を選んだ。

横から見た奥行き



ミニパイナップルと

ミニパイナップルと
枯紫陽花 △2頁の花▽ 櫻子

花材 ミニパイナップル

(パイナップル科)

紫陽花(紫陽花科)

リビストニア(椰子科)

花器 水玉文陶鉢

観賞用のミニパイナップルにしては大きな実をつけていたので、剣山に太い茎をしっかりと挿した。猛暑も平気な実とヤシの葉。美しく枯れた紫陽花を添えて。

横から見た奥行き



今年も祇園祭に参加した。「浄妙山」は平家物語の宇治川橋合戦で、三井寺の僧兵筒井浄妙と一来法師が共に奮戦する勇壮でドラマチックな山。



バンクシア

△3頁の花▽ 桜子

花材 バンクシア(ヤマモガシ科)

レナンセラ(蘭科)

花器 赤色ガラス花器

バンクシアはオーストラリア原産ヤマモガシ科の常緑低木。このバンクシアは松の枝葉に似た茎の中から穂状の花を咲かせる。世界中を航海して各地の珍しい植物を採取したジョセフ・バンクス卿に因んでいる。

這うように伸びる低木なので、大きくはいけられないが、こんな時は吸水性スポンジ(オアシス)を使うと良い。茎が直接水に浸かる場合と比べて水が汚れにくいのも有り難い。花器にびったり詰めれば重たい枝も動かない。

ワインレッドのガラス器にいたので、足元はレナンセラを挿した。スポンジにしっかり水を吸わせていても毎日水を足してあげる事が大切。

横から見た奥行き



避難生活

先月号の2頁、西日本豪雨を6日までとしたのは7日までの間違いです。訂正いたします。

東日本大震災と熊本地震を合わせるとおよそ10万人が未だ避難生活をされている。そしてまた西日本豪雨である。他にも各地で起こった自然災害。温かな支援が継続されますように。可能な限り早く普通の暮らしを取り戻されますように。



ベルギーナッツ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 ユーカリ・ベルギーナッツ

(フトモモ科)

トルコ桔梗2種(竜胆科)

花器 陶花瓶

このユーカリの実がベルギーナッツと呼ばれている。ドライの実として見たことはあるが、珍しく葉のついた生の切り枝で売られていた。面白い花材だが色が地味なので、紫と白のトルコキキョウをとり合わせ、ブルーの西洋的な花瓶にかけた。

ユーカリは小枝だが実はかなり重い。その重量感とバランスがとれるようにトルコキキョウをいけている。一重咲きを軽やかに高くして、八重咲きを花器の口元に集めるのがポイント。白花がよく効いてくれた。ユーカリは種類が多く、花も実も個性的だ。今後も新たなユーカリとの出逢いを楽しみにしている。

横から見た奥行き



立華時勢粧りっかいまようすがたを読む (49)

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

美人草

祝言。前同。虞美人花と云う。(虞氏とい
う美人の塚より生ずる故なり)

異名、麗春。

芥子花けしのはな

祝言上に遣いて中より下る。

異名、嬰粟花おうぞくか。米囊花。

この花散りやすき物なれば、所によりて用
捨あるべし。紅白紫いろいろ取り混ぜ指す時
は、一種二種立て分け、色取りよく花ごとに
働きあるように立つべきなり。

うつぼ草

祝言。水ぎわ。

和名、うるき。

春菊

祝言水ぎわより前置のすこし上まで用うべ
し。

異名、蒿菜花。

第二十八図

立花 伊吹除真

除心の内草の花形 相田湛流

伊吹 杜若 薄 柏 姫百合 檉木 柘植

夏櫨 著我 檜

全118図のうち、杜若は30作に使われている。
春のツツジやシャクヤク、夏のユリ、秋のケイ
トウ、キクとの組みあわせがある。第二十六図
は「除心草の花形」の中の一つ。初夏の立花。



銀宝珠

非祝言。水ぎわ。法師に詞通するゆえに祝言にあらざるなり。

異名、玉簪花。大菊大蘭。白靄仙。

花は中まで立てのぼせ、葉は水ぎわにあしらう。裏葉、表葉、やれ葉、大小とりまぜて三枚ばかり遣うべし。尤も陰陽の心得あり。水ぎわにて茎きれいに見するを第一とす。

杜若

祝言上中に使う時はかならず水ぎわにも遣うべし。これ水草なればなり。

本草綱目図する所は、日本のかきつばたにあらず。藕敬そけいが本草の註に劇草かきつばた、一名馬蘭と云々。順和名集に劇草の字を用いる。

異名、紫菊。かほよはな。

齋宮花尽の異名の歌

夏草のおほかる中にかほよはな折袖までもむらさきになる

杜若真の二色というは、前置までも残らず杜

若にて立てるなり。然れども前置になる杜若なき時は、ほかの草花をもつて前置にする。これを草の二色と云う。口伝。

杜若の二色すすきに薄の葉を借り用いる時は、一枚ずつもぎ葉にして二枚を二所に借るべし。葉二



第九十七図

立花 杜若二色

杜若二色(の真) 寺田清九衛門

杜若 著我 ※ () 内は初版

枚と付けたるは陰陽そなわりて、全体薄と見ゆることを嫌うなり。

杜若一色を立てんとおもわば花多く調え、白き、紫、つぼみ、中ひらき、盛りの花茎の曲直、葉の能をえらんで、同意長くらべという事を第一と心得て指すべし。然りといえど師伝と巧者の二つかけては指し得がたし。

同一色には白き花をすくなく、紫をおおく用うべし。紫は正色、白きは変色なり。花の彩つづき面白く、混乱せざるように立てるを第一とす。

杜若正心に用いる時は花より葉を高く、花より葉を多く用うべし。

杜若の花数すくなき時は、一八、花しょうぶなどをかるに、一本かる時は大き方にひかれて杜若となるなり。二本かる時は杜若にならず。

かきつばた紫白の種かわりたりといえど、祝

言の花の時は紫白合わせて、四本六本立てることを嫌う。他これになぞらえて知るべし。

杜若の葉はひらめによく見ゆるように指すべし。又葉を横へ遣う時は、茎の中ほどに付きたる葉をえらんで、茎をためて思うように遣う時

第九十八図

立花 杜若一色

杜若一色（の行） 桑原次郎兵衛

杜若 河骨 著我 ※（一）内は初版



は、水をよくあげ葉もしおれざるなり。茎のためようは両手にて押し寄せ、すこしねちてため、そのため口へ頭より竹くぎを打ち込む時は、ためもどらざるもの也。



杜若ためようによりいろいろにくるうなり、口伝。

杜若盛りの時分ならば、正心、請、副に用うべし。四季咲き又は残花などには立てようあり。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成 第一期第二巻』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）



「立花時勢粧下」に秘曲の図として掲載されている7つの「二色」の一つに「杜若二色」がある。杜若二色では前置を変える場合、杜若が水草なので同じ水草の河骨（こうほね）が使われている。茎の撓め方が詳しく書かれている。両手で押し寄せながら少しねじって撓めたところへ、竹くぎを刺すと撓めがもどらない。さらに撓めによって色々に狂う（花茎が曲がる）ことを教えてくれている。

第九十九図

二株砂物 杜若二色
杜若二色の砂の物 西村松庵
杜若 河骨 蒼我



ピンククッション

櫻子

花材 ピンククッション（ヤマモガ

シ科）

羽毛鶏頭（寛科）

ローリエ（楠科）

花器 陶花瓶

ピンククッションも針山はりやまも知らないと若い学生は言う。家には無いし見た事もないのだろう。小さなソーイングセットくらいしかないのかもしれない。アフリカやオーストラリアには他の国とは違う独特の珍しい植物が沢山ある。

似ているものに例えられた名前も多くカンガルーポ、ブラシノキ、ライスフラワーなど、最初に見つけた人は嬉しくて夢中になって木や草に名前をつけたのだろうか。よくこんなにピツタリと思える名前を考えたなあと感じる事も多い。

艶やかな光沢のあるウモウケイトウを葉のように添えた。

横から見た奥行き





輸入花材の生花

リュカデンドロン（銀葉樹）は南アフリカ原産、ヤマモガシ科の常緑樹。長めの枝なら生花にできる。
ドラセナ・ブラックリーフは千年木（コルディリネ）の仲間と思われる。蘭を合わせて色を加え、シャガを借葉として添えた。

リュカデンドロン

△10頁の花△

仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 リュカデンドロン

（ヤマモガシ科）

子株 ミニ薔薇（薔薇科）

花器 陶水盤

ブラックリーフ

△11頁の花△

仙溪

花型 生花 二種挿し

花材 ドラセナ・ブラックリーフ

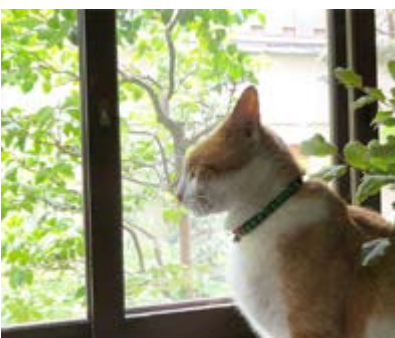
（竜舌蘭科） 蒼我（菖蒲科）

ミニ胡蝶蘭（蘭科）

花器 ガラス花器



横から見た奥行き



レモンだより
庭に何かいるのかな？



セルリア

櫻子

花材 アンスリウム(里芋科)

セルリア(ヤマモガシ科)

斑入モンステラ(里芋科)

花器 青色ガラス花器

今年の夏は暑くて暑くて花が保たなくて、とても苦労した。それでも新しく花を生け替えると、スツトリフレッシュして自分も元気になる。水がお湯にならないように何度も花器に氷を入れたり、夜寝る前に水を替えたり色々工夫した。日持ちする花を選んでいたので、今月号にはオーストラリアや熱帯の植物が多い。アンスリウムの足元に添えたセルリアもオーストラリアからの輸入花材。南アフリカ原産の常緑低木で柔らかで繊細な花だ。他が枯れてしまった後もドライフラワーにして長く飾っている。英名のブラッシング・ブライドは「はにかんだ花嫁」という意味なので、ウェディングブーケに使われる花だそうだ。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
9 月号
No.675

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





十三世の花器

△2頁の花▽ 仙溪

花材 アンズリウムの葉(里芋科)

紅の木の实(紅の木科)

オンシジウム(蘭科)

花器 陶花器

先々代が買い求めた花器の中では、かなり大きな部類の一つ。とても重いので花展に使うこともほとんどなかった。以前の「テキスト」に使われていないか調べてみたが、43年前に京都朝日会館で開催された13世家元の「桑原専溪個展」の一作として紹介されている(左頁の写真)。藤蔓を器にからませてサボテン、熱帯の枯実を加え、口元にスターチスの枯花が挿されている。会場の中の異色ある作品だったと書かれている。今回はあまり気負わず初めての感触を味わった。ブロンズ色の葉が器の縞模様と調和している。ベニノキはメキシコ原産の常緑低木で、英名リップステイック・ツリー。実の中の赤い種子は食品の赤色染料(アナトール)や料理の味付け、口紅などに使われる。





風船唐綿の実

△3頁の花▽ 仙溪

花材

雪柳（舊薇科）

風船唐綿（夾竹桃科）

gai mo ko

gai mo ko

トルコ桔梗（竜胆科）

花器

陶花器

フウセントウワタは南アフリカ原産の多年草で、白色の小花のあと突起のある袋状の実ができ、やがて実が割れると白いシルクのような毛の房をつけた種子が風にのって飛んで行く。キラキラと光る綿毛が無数に舞う光景が目につく。

切り花のフウセントウワタには少し葉が残っているものもあるが、繁みのあるものをとり合わせるのがい



テキスト 153 号（1976 年 3 月）より。



恐竜

△4頁の花▽ 健一郎

花材 グラプトペタルム（弁慶草科）
チランドシア（パイナップル科）

花器 ガラス容器

この作品は見て頂きますように「いけばな」となかなか言いづらい性質を持っている。水ではなく、土を見せているところ、多肉植物、エアープランツ、折り紙、恐竜…。小学生にも楽しんでもらえそうな作品ではあるが、最近自分が問題だと捉えている事の表現になっている。花、花器と向き合う時に自然と生まれた土への強い意識。その他にも思想の断片が作品から見てとれる。なぜ恐竜が土を向いている物があるのか。土の中の恐竜と土の上の恐竜の違い。なぜ折り紙なのか。なぜ多肉植物か。

他の芸術作品と違い、生け花は問いかけのある作品が少ない。実際に生け花作品と向き合った時に考えさせられるものはほんの一握りだ。それが退屈か退屈ではないかの話では無く、少ないというだけである。

花を使って問いかける作品を考えてもいいとは思いますが、花を扱う以上、慈愛の心が込められている事が何よりも大切である。

レモンだよ

2ページの花器の大きさが伝わるように協力してくれています。大きさが伝わるかによ。



王様同士

△表紙の花▽ 櫻子

花材 キングプロテア（ヤマモガシ科）
葡萄（マスカット）（葡萄科）

花器 ガラス花器（ドイツ製）

8月初旬に岡山から葡萄をいただいた。飾りたくなるほど綺麗な葡萄だ。酷暑の中丹精こめて育てられた大変さと思う。

8月半ばに山梨県のワイナリーへ見学に行ってきた。周りを山々に囲まれた丘の上に葡萄畑が広がっていた。標高が高く冷涼で日あたりにも恵まれているので、とても甘い葡萄が出来るそう。よく見る棚仕立ての他に品種によっては垣根仕立てもある。葡萄の木の足元には雑草が残っており、あえて自然の植物と競争させていた。

雨避けビニールの屋根が木の上に被せてあったり低い実の部分に掛けてあったりと、きめ細かに一つ一つの葡萄が守られていた。どの畑にどのような品種が適しているのかも考えられているようだ。

葡萄もワインも愛情を込めて作られていて、風土を生かした繊細な味わいに感動した。

今回は切りたてのキングプロテアと取り合わせた。どちらも王様！



最近の休日

健一郎

学校で毎日したいことばかりしている。今日が何曜日でも何日だったか分からなくなる。明日する事も分らずに、毎日したいことばかりしている。

大雑把ではあるが、毎月自分なりに予定を立てる。お花のお稽古の日を決める。美しいものに触れる日を決める。仕事の日を決める。毎月自分のしたいことで埋まっているスケジュールを見ると□元が緩む。

自分の組んだスケジュールを誰がこのスケジュールを組んだんだと、文句を言いたくなるぐらいタイトなスケジュールの日もあれば、午前で用事が終わってしまう日もある。突然できた隙間時間には、決まって本屋に行く。2、3時間の時間なら、家から近くの大垣書店で徘徊する。家の近くに本屋があるのはすごく助かっている。椅子があつて長居ができる店舗もあり、晩御飯をこしらえてる副家元を待たすこともある。ある程度まとまった時間があるときは、岡崎のほうまで行く。バイクを使うとすぐに着く。岡崎の方に行くときには必ず周りのギャラリーの催しも確認してから行くようにしている。なかなか面白い企画にいつ行っても出会う。MORI YU GALLERYな

んかは、最近のお気に入りだ。

この間買い物で河原町のあたりに行った帰りにBALの丸善にいつて本を15冊ほど買ってきた。本を買う前に中古でその本が売られていないか探すのだが、最近欲しくなる本はなかなか売っていない。本を持って店内をうろついている自分をふと客観視すると、本を元の位置に戻す仕事を任された学校の図書委員さながらだ。いざ買おうとレジまで持っていくと「お持ち帰りですか？」と聞かれる。7冊と8冊で分けられたパランスの悪い布地の袋を左右に持ってゆっくりと帰る。いつの間にか夜になっていた。鴨川の河川敷を歩いて帰ると涼しい夜風とともに冷たい柳が揺れている。昼間は私を警戒していたサギも今は油断しているのだろうか。触れられそうな距離にいる。

本屋に行くたびに家に増え続ける本。この本全てが頭に入っているわけでももちろんない。知識を詰め込むことが目的ではない。そんなものはパソコンにでもやらせておけばいい。容量さえあればなんでも一字一句間違えずに記憶することが出来る。

必要なのは知識でなく、自由気ままに生きる為の知恵だ。

私は本を読むことで価値の選別を

行っている。大事なことはメモを取らなくても覚えているものだ。大事だから。覚えられなかったことは今の自分には必要のないものだ。

このように自分の脳を使って私がものを考える際に、大事だと思ふ情報の選別を行っている。無理に覚えようと思わないし、忘れないでおこうとも思わない。頭に残ったものだけが私にとって必要な情報なのである。無理に覚えようとしなくていいと思えると気楽に思える。



立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

犬子草
えのこ

七重草

非祝言。水際。

葱草

同前。

さんき草

非祝言。水際。

矢筈

同前。

秋海棠

非祝言。水際。



第六十五図

立花 松真水際指分

菱屋六兵衛

松 晒木 梅 竹 柘植 椿 嫩 水仙
柏

二つ真のように水際から一直線に空間が空けられているが前置で左右が繋がっていることと、真はあくまでも一つである。この左右を合体させたならそのまま幽美な立花となる。夫婦仲睦まじく寄り添う姿に見えてくる。例えば金婚式のお祝いに立てるならこんな立花がいい。

いささ

祝言。下。

野かいどう

非祝言。下。

けまん

同前。

茜草

祝言。下。

莎草こうかし

祝言。下。

桜草

祝言。下。

虎尾

同前。

つち草

祝。上。



第八十八図

立花 二真

(初版には 二ツ真 眞春軒)

竹 松 梅 檜 嫩 水仙 椿 千両

伊吹 栢植 枇杷

水際指し分けとは全く違う世界感で立てられている。異なる二つの真を持ち、左右それぞれ別の景色が垂直の空間を隔てて作られ、しかも全体が調和している。何と言っても中央のあきがつくる強いなものに圧倒される。時空を越えて二つの世界が調和する不思議な立花だ。

金玉花

祝言。下。

にし木々

非祝言。下。

うつほ草

祝言。下。

山茨菰やまほおづき

祝言。下。

ばれん

非祝言。中。

仏生花

同前。

岩芭蕉

非祝言。中。



第八十五図

立花 松合真

(初版には 合真 寛春軒)

松 梅 檜 柘植 椿 伊吹 熊笹

嫩 枇杷

真には相生真、合真、二つ真、直真、除真の五つあり、その一つ「合真」は二本の若松をぴったり合わせて真に立てた立花で、婚礼の席で立てられる。若松を新郎と新婦に見立てた特別な立て方。紅梅と白椿の紅白がハレの日にあふさわしい。器にも縁起のいい瓢箪が見える。



柴栗の実

△ 9頁の花▽ 仙溪

花材

柴栗しばくり（櫟科）
竜胆りんとく（竜胆科）

スプレー菊（菊科）

花器 脚付方形陶水盤（伊藤典哲作）

栗と人との関わりは遙か縄文時代に遡る。青森県の三内丸山遺跡から出土した栗をDNA鑑定したところ、栽培を繰り返していたことがわかった。栗は良質なでんぷんに富み長期保存が可能。4～5千年の栽培の歴史があるわけだ。

立華時勢粧には立花の花材解説で「栗の若ばえ」を下段に使うと書かれている。おそらく新芽から若葉が出はじめる春に使ったのだろう。栗の芽吹きはいけたことがないが、江戸時代には身近に採集できるちよつと気の利いた花材だったのか。

今はもっぱら栗の毬いけがを楽しむ花材として夏から初秋に出回る。青い毬は小さく可愛い。保ちが悪いが季節を感じられるので毎年いけるのを楽しみにしている。





石化金雀児

せつかえにしだ
 〆10頁の花〆 仙溪

花形 生花 草型 副流し

花材 石化金雀児（豆科）

花器 煤竹竹筒

「金雀児」「金雀枝」と書くが日本が中国が原産のように思うが、エニシダは地中海沿岸原産の低木である。晩春に黄色の蝶型の小花が枝一面に咲くと、黄色い繁みがあちこちに現れる。古い学名の「ゲニスタ」が訛ってエニシダとなった。小低木という意味だそう。ちなみに英名はブルーム（箒）で、この枝で箒をつくっていた。

枝が帯化した「セッカエニシダ」と呼ばれるのは白花品種のシロバナエニシダである。

エニシダの生花は細枝の付き方を要所所に生かす工夫が必要となる。櫛で解いたように線をそろえていけるには技術と根氣がいる。

セッカエニシダの場合、枝先の石化した姿を生かしておよその形をつくり、その間に細枝で厚みをつけてゆく。





菊の株分け生花

〈11頁の花〉 仙溪

花形 生花 株分け

花材 糸菊(菊科)

小菊(菊科)

花器 かいらぎ釉陶水盤

(木村盛伸作)

菊の季節の始まりである。

菊はもともと中国で生まれ、寒気に耐えて花開く姿から不老長寿をもたらす仙薬とされた。また文人に好まれ、高潔に生きる象徴として梅蘭、竹とともに四君子と呼んで尊んだ。

古く日本に渡った菊の品種が爆発的に増えるのは江戸時代の園芸ブームによる。元禄8年の「花壇地錦抄」には250種あまりの菊が紹介されている。京都の寺院で催された「丸山菊大会(享保2年)」では143人が参加し380種の菊が集まった。菊栽培の技を競い合っていたことがわかる。

多様な菊をいけて楽しむ文化を後の時代にも繋げてゆきたい。



空海

仙溪

先日テレビで空海が辿った中国の道を紹介する番組を見た。

空海は774年、讃岐国の郡司の家に生まれ、のち平城京へ上つて勉強。19歳からは大学での勉学に飽き足らず山林修行をはじめ。

804年、第18次遣唐使に学問僧として加わるが、空海を乗せた第4船は嵐のため目的地の遙か南の福建に漂着。福州で許可を得て閩江を船で遡り、陸路で仙霞古道を浙江省へ。富春江を下って杭州に辿り着き、ようやく本来のコースにもどったことになる。唐の都、長安に着いた空海はわずか2年で千人を超える中から密教の正当な継承者に選ばれ、帰国後には高野山で真言密教を開き、万民救済につくした。

番組では空海が体験したであろう多様な自然と文化を紹介していたが、その中で一際印象に残った風景が江郎山だ。高さ300mの2枚岩の隙間は垂直に天を突く。大自然に圧倒されると、人はなんとちっぽけなのかと思う。でも人は自然を糧にして豊かな文化を育むこともできるのだ。

私の中では江郎山の絶景と二つ真の立花が重なった。どちらも宇宙の神秘が感じられる。





センダンの実

△12頁の花▽ 仙溪

花材 柊せんたん（柊科）

薔薇ばら（薔薇科）

ガーベラ（菊科）

花器 陶花器

鴨川の御池大橋東詰にセンダンの木がある。5～6月に薄紫色の花が集まって咲いているが、高木なので気付く人は少ない。花のバニラに似た芳香も風で飛ばされて下を歩く人には届かないようだ。

そんなセンダンも秋から冬にクリーム色の実が鈴なりにぶらさがり姿は人目を引く。その実を見てはじめてセンダンがそこにあったことに気付く。

センダンは古名をアフチ、オフチと呼び、万葉集の歌からはこの実の種子で髪飾りをつくったことがわかる。

まだ青い実を器から簪かんざしのように出し、赤とピンクの花で華やぎを加えた。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
9 月号
No.687

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





草紫陽花くさあじさい

△表紙の花▽ 櫻子

花材 狗尾草えのこぐさ (稲科)

草紫陽花 (紫陽花科)

鉄線てつせん (金鳳花科)

花器 金属裝飾陶器 (モロッコ製)

クサアジサイはアジサイに似ているが、草である事に由来してこの名前になったようだ。葉も互い違いに生えていてアジサイとは趣きが違っている。

控えめなクサアジサイだが、一輪添えただけで花全体が優しくなる。

ブドウやエノコログサと取り合せて秋が早く訪れる事を願う。



心の情景をいける

△2頁の花▽ 仙溪

花材 紐鶏頭ひもけいとう (鳶科)

鶏頭けいとう (鳶科)

沢瀉ざさ (沢瀉科)

花器 十角青色ガラス水盤

以前、黄色くなつたオモダカの葉に水辺の草花をとりあわせていけたことがある (テキスト2011年10月号)。その花



と文章を父・仙齋が褒めてくれた。キツネの家族が楽しげに遊ぶ様子を想像していたのだが、私にとって、何かをつかんだ大切な1作となった。花と器で、借り物でない自分の心の情景を形にできる。そんないけはなが大好きだ。

初秋の立花

△3頁の花▽ 仙溪

花型 除真立花

花材 梅花躑躅(躑躅科)

数山査子(雪の下科)

雪柳(薔薇科)

檜扇の実(菖蒲科)

鶏頭(苧科)

竜胆(竜胆科)

小菊(菊科)

花器 陶広口花瓶

夏の終わり頃から、色づき始めた葉や実物が花屋に出てくる。

真、副に使ったバイカツジも艶のある葉が赤くなり始めている。ヤブサンザシの実はこちらからだんだん赤くなってゆく。秋風そよぐ季節ももつすぐだ。ユキヤナギで厚みを加えている。



春を生ける

△4頁の花▽ 健一郎

花型 生花 株分け

花材 ユーカリ（フトモモ科）

ピンクッション

（ヤマモガシ科）

花器 陶水盤

ピンクッションは南アフリカを代表する花だが、オーストラリアで品種改良をしており、それが日本にやってくる。冬を終えて春を迎えるオーストラリアの花たちを、日本で生けることができる。当たり前になりつつあるが、不思議な出来事である。花屋では、春と秋が混在している。同時刻に二つの季節が地球にあると思うと胸が弾む。環境の数だけ生物の多様性がある。その環境に馴染むよう進化を遂げるほどに帯びる特徴を愛でていたい。

ユーカリ本来の撓みを生かし足を交差させて固定する。ピンクッションは葉が悪くなりやすいので葉に注意して選びたい。

横から見た奥行き





唐胡麻と鶏頭 とうごま けいとう

△ 5 頁の花 V 仙溪

花型 生花 株分け

花材 唐胡麻 (燈台草科) とうごま

鶏頭 2 種 (苧科) けいとう

花器 陶水盤

トウゴマの大きな葉、小さな葉、微妙に色合いが違う葉に、赤く細い葉脈が伸びる。あまり保ちは良くないが、貴重な傷みのない葉は、見ているだけで心地よい気分になってくる。状態の良いトウゴマだったので、ケイトウと生花にいけた。



お稽古もマスク着用でおねがいな。



風に揺れる

△ 6 頁の花 ▽ 櫻子

花材

矢筈薄やはすずみ（稲科）

グロリオサぐろりおさ（百合科）

九蓋草くがいそう（胡麻の葉草科）

花器

陶花瓶

野生のグロリオサをインドで見たことがある。女性の奉仕団体のメンバーとして、その国際大会がインドであり、現地をバスで移動している時だった。空き地の草むらに赤い花が咲いているのを見つけた。真っ赤なグロリオサだった。

グロリオサは熱帯アジアおよびアフリカ原産の多年草。和名はキツネユリで、ユリ科またはイヌサフラン科に分類されている。

グロリオサは体を支えるために、葉の先を伸ばして他の草の茎などに巻き付く。炎のような花の姿も独特だが、葉先のクルクルも愛らしい。

インドの草むらで見たイメージでグロリオサをいけてみた。

グロリオサの葉を丁寧に残し、ヤハズスギと投入にすると、野原で他の草を頼りに、風に揺れながら咲いていた赤い花と重なる。色の効かしに薄紫のクガイソウを加えた。



コボウズオトギリ

△7頁の花▽ 櫻子

花材 ヒペリカム（弟切草科）
ガーベラ3色（菊科）

花器 デルフト陶花瓶

ヒペリカムは赤い実を小さなお坊様に見立てて、コボウズオトギリとも呼ばれる。

赤い敷物は灼熱の大地。そこに涼しげな青い絵付けの花瓶を置く。器の模様を雲と見れば、雲海を下に見る天界に咲く光の花と修行僧のイメージに、とは大袈裟か。

以前、インドの高地にあるヒンズー教の聖地を訪れたことがある。聖なる山の宿坊に各地から巡礼者が何日もかけて集まってくる。そして皆、決まって頭を丸める。乳飲み子も含めて家族全員だ。私達を運んでくれた運転手も翌朝丸坊主で現れた。この地で坊主頭になることが長年の夢だったと目を輝かせて教えてくれた。そんなことを、この花の写真を眺めていて思い出した。



『小作の着眼点』
しょうさく

ヒマワリに表情を

△8頁上の花▽ 健一郎

花材 ヒペリカム（弟切草科）

向日葵（菊科）

花器 金属裝飾陶器（モロッコ製）

「小品花は普段魅せる事ができない植物の姿を魅せるといい」家元の言葉である。まず、ヒマワリと向き合った。回しながら見るとなんと後姿の綺麗なことか。横姿のヒマワリ、枯れたヒマワリ、花弁が散ったヒマワリは大好きだったが、後ろ姿にここまで惹かれるとは思ってもみなかった。一番立派なヒマワリを長く控枝に置いた。



横から見た奥行き

伸びやかなヒペリカム

△8頁下の花▽ 櫻子

花材 ヒペリカム（弟切草科）

向日葵（菊科）

花器 金属裝飾陶器（モロッコ製）

ヒマワリを低く、ヒペリカムを高くすると、ヒペリカムの動きが生きてくる。



モロッコの器にモロッコ料理の「クスクス」を盛り付けるイメージで。

『くちぐせ 口癖』

健一郎

3年ほどラーメン屋さんでアルバイトをしていた。ラーメン屋さんで人気のあるラーメン屋だが、そんなに美味いわけではない。丁寧な接客をするラーメン屋で、お客さんへの配慮が行き届いているのが特徴である。だが22時以降になると愛想の良い女性従業員はいなくなり、夜の3時までは気分にもうのある男だけのラーメン屋さんになってしまふ。

私が働いていた時間帯は22時から3時で、忙しい日が多かった。夜中の1時から閉店の3時までにかけては従業員の疲労がピークになってくる。「しんどい」「疲れた」「なんでラーメン作らなあかんねん。」ラーメン屋で店員さんから一番聞きたくない言葉である。そんな中、頭のネジが足りていない僕は何に對しても「ちょろいすわ」というのが従業員同士での会話の口癖で、周りに流されることなく、自分の接したいようにお客さんとお話をしていた。

「ちょろい」という言葉があまりにも特徴的だったため、私をからかうようにみんなが真似をしていった。「ちょろい」という言葉は、余裕がありますよ。という意味で使っている。ちょろいと云っている

と、一日中笑顔の絶えない感じのいい店になった。ラーメン屋のバックヤードで話す従業員同士の会話の第一声が「ちょろい」に変わっていく。ラーメンをこぼしても、「ちょろいって、すぐ持つていったら良いやん。」

従業員同士で癖のようにちょろいと言いつづけていると、ちょろいが先行し、後に続く言葉が絞られてくる。ちょろいという言葉は、ラーメンがこぼれた事と向き合うのではなく、どのように次行動するかを考えさせる。時にはなんでも軽視する悪ふざけのような雰囲気になりそうな時もあったが、楽しくアルバイトをすることができた。ちょろいと言つてしまふとなんでも出来そうな気がする。世の中をなめていた大学生の口癖がラーメン屋の雰囲気を少しだけ変えたのだ。

口癖が人生を大きく左右すると言つたら言い過ぎになってしまうのだろうか。

言葉が及ぼす人への効果、人への効果を考える上で面白い話がある。「五体不満足」の乙武洋匡さんは四肢欠損の状態で生まれた。乙武洋匡さんは母親に愛され、「あなたはなんでもできるのよ。」と言われ続けて育つたそうだ。赤ん坊が「私には出来ない」と思い込むわけもなく、そのままの自分を受け入れ、自信をつけた。母親の言葉(愛情)を多分

に受けて育つたのである。話を聞けば聞くほど、自信に満ち溢れてキラキラとした乙武洋匡さんにかなりようが無かったようにすら思えてくる。

人は言葉によって思考する。その人を取り囲む言葉がその人である。自分の周りの言葉がどんな言葉でできているのか、人へ伝える言葉はその人に影響を及ぼし、その人を形づくる。

グループホーム(認知症対応型共同生活介護)では非言語のコミュニケーションはもちろん大切だが、言語によるコミュニケーションの効果も人間関係の構築の上で大きな影響を与えている。

職員が利用者に対して言葉によって影響を与えていることは確かにあるのだが、私が働いていて驚いたのは、利用者が職員を動かす力である。今はおおむこうにいらつしやる、おばあちゃんであった。彼女は目の前での出来事と全力で向き合う。「先生(職員)は日本一やー!!」「ここで頂くご飯はみんな美味しい。」「私、幸せや。」「トイレ、入浴の際には、必死に抵抗するが、人間らしくていいと誰もが思わさせられる。事が終わると、「ほんま、おおきに。ごめんな。」「言葉が彼女の全てであったと思うほどに、深い感情を込めた言葉だった。すべての職員だけでなく、他の利用者からも気をかけられてお

り、私の働いているフロアを中心にいつでもいた。

私達は言葉によってしか思考できない。なぜなら、言葉を使わずして思考できないからである。私達は言葉に支配されている。自分の言葉でしか世界を見ることができない。

私は恵まれている。沢山の素敵な言葉を浴びて育つた。自分で言葉を選択できるようになるまでは言葉を選ぶ事ができないが、言葉を選ぶ事ができるようになると、その後を選ぶ事ができる。

私は問題に直面した時の口癖はある程度限定されていると考えている。それは問題が起こった時、とつさに出てしまう言葉のことである。問題に直面した時にその人がでる。余裕が無くなり、純な姿が垣間見える。

そもそも問題とは、自分の理想と現実の差である。そして解決することができるのは、自分の問題のみであることを忘れてはならない。解決出来ない問題は他人の問題のみだ。他人の問題で頭を悩ませるほど大変なことではない。他人の問題を自分が問題にしているだけなのである。

自分の問題は解決し易い。問題に對して柔軟に自分が変わることでの問題は解決する。問題と出会った

時の自分の反応次第で問題は大きくも小さくもなる。問題だと思わなければ問題ですらない。問題の区別、問題への反応、問題への対応のサイクルが自分を形作る。

今の私の口癖は今、2つある。1つ目は「余裕ですよ」である。大学生の頃と変わらない。私は解決が困難な問題と向き合ったかも知れないが、余裕だと思つて取り組んでいたので気がつかなかった。余裕というと、それが解決できると勘違いするために頭が動き始めている。口癖になり、反射的に出てしまふ。この言葉に後押しされて興味のあることをなんでもやつてしまふ。

2つ目は「最強の家元」である。何年か言っていると家族から心配をされるようになった。最強の家元やねんろ?自分ばかりお肉食べてんと人にあげや!!」「最強の家元やつたら朝ゴミ出すねんで!」「最強の家元ノ食器拭きして!」いいように使われている気がしなくもないが、この積み重ねが、最強の家元になるために必要だと考えている。最強の家元になるものではなく、ならさせてもらうものなのだろうか。

今一度、自分の使っている言葉を考えるのも面白いかも知れない。

古代インドの蓮のイメージ

仙溪

ハス（蓮）は「泥より出でて泥に染まらず」と言われるように、ハスは清浄と不浄が混在する中における悟りの象徴という清らかなイメージがあるが、そもそも仏教が伝わってゆく過程で、ハスがどのような意味を持ったのかを探ってみよう。

まずはインドの古代遺跡にハスが登場する。釈迦の死を「涅槃」というが、涅槃とはあらゆる煩惱が消滅し、苦しみを離れた安らぎの境地、悟りの世界のことをさす。インドにおいては涅槃の象徴として、釈迦の遺骨（舍利）を祀るス

トゥーパ（舍利塔）を建て、信仰の拠り所とした。ストゥーパは丸い鉢を伏せた形をしていて、そこに納められた舍利は「種子」、それを覆う覆鉢は「子宮」や「卵」と同一視され、万物が生ずる宇宙の始原的な意味合いを視す。

ストゥーパの周囲は石の門や玉垣で囲われ、それらに釈迦にまつわる物語が彫られている。また力強い生命力を表現した様々な装飾も彫られているのだが、煩惱の無い生命の輝きそのものとして、ハスの模様が多く見られる。

ハスは水から生まれ次々に花を咲かせ、その地下茎は水面下で網のように伸び広がる。根茎を二股に枝分かれさせながら節々から葉や花を生じるハスの生命力に、古代インド人は魅了さ

れた。

図①の浮彫は蕾、開花、実、葉が生き生きと表現されて、まるで蓮一色のいけばなのようだ。しかしこの丸い壺は生命が生まれる根源としての「水」の表現であって花器ではない。壺に満たされた水からハスが生え出る様子を表している。古代インドで大層好まれた誕生と生成の模様で「満瓶（プールナ・ガタ）」と呼ばれている。

また、ハスの茎を波状に表して、節々から枝分かれしながら花、葉、水鳥などで埋め尽くす「蓮華蔓草」は、生成と増殖を象徴する重要な装飾文である。（図②③）

インドにおける誕生、生成、増殖の象徴としてのハスは、やがて中央アジアや中国では別の意味を持つことになる。

参考図書：『仏教美術のイコノロジー』
宮治昭著（吉川弘文館）



出典：『仏教美術のイコノロジー』 宮治昭
（吉川弘文館）

壺に満たされた生命の根源としての「水」からハスが生え出る様子。誕生と生成の模様で「満瓶（プールナ・ガタ）」と呼ばれている。パールフト遺跡（インド中部）。



出典：『仏教美術のイコノロジー』 宮治昭
（吉川弘文館）

丸い壺から出る蓮華蔓草が、中央の開花した蓮華を一周している。ハスの花は太陽の花であり、生命の花であり、増殖の花である。パールフト遺跡（カルカッタ・インド博物館）。



出典：『仏教美術のイコノロジー』
宮治昭（吉川弘文館）

マカラ（インド神話に登場する怪魚）の口から発出する蓮華蔓草。サンチー遺跡、第一塔東門。

『桑原専慶流いけばなテキスト』

50年分公開（1962年～2012年）

※京都市文化芸術活動緊急奨励金対象事業

桑原専慶流『テキスト』は13世家元が昭和37年10月から月刊誌として発行を始め、58年間続いています。この度、『テキスト』50年分の生け花写真と解説、随筆をデジタル保存し、公開することになりました。インターネットに繋がっていれば、パソコン、タブレット、スマホで自由に閲覧できます。

新型コロナウイルス感染症の影響で様々な活動が制限される中、ゆつくり過去を振り返る余裕が生まれて実現できました。ぜひとも気軽にページを捲ってみてください。

（パソコンではアドレスを入力して下さい） ←



<https://kuwaharasankei.jp/tekisuto/>

本棚から本を選んでください。年別と月別の2種類の本棚があります。



↑ パソコンで見た1962年の『テキストNo.1』。本のページをめくるようにご覧いただけます。

どこを開いていても最初のP2に戻れるボタン（画面上部にあります）

▶▶ 本棚に戻るボタン（P2上部にあります）

※『テキスト』のデジタル公開にあたり、公開する内容を、生け花写真とその解説、いけばなに関する随筆、家元関連記事のみとしました。

個人情報に配慮し、集合写真や出品記録、師範者名、出品者名などは公開していません。



スマートフォンの縦向けの場合、1ページずつご覧いただけます。スマホやタブレットでは、下のQRコードをカメラで読み込んでください。





同系色の組み合わせ

△12頁の花▽ 仙溪

花材 ビバーナムの実（忍冬科）
透かし百合（百合科）

花器 ガラス花瓶
（スウェーデン製）

テキスト2003年10月号に母（ホッホチャン）がビバーナムの赤い実をいけているが、その時の今にも落ちそうなく熟した艶やかな実を今も時々思い出す。プリッと熟れた実には葉が無かったので、紅葉したナナカマドをとり合わせていた。父・仙齋が自動車の切り絵を貼った山をつくって、秋山へモミジ狩りにゆく文章を添えている。ホッホチャンとケンチャンの会話から生まれた「花遊び」の一つだ。

今ではそのケンチャンが、ナツチャンと一緒に花遊びを引き継いで、2年前からインスタグラムに写真を載せている。彼らと同世代の若者にも花に関心を持ってもらいたいとの思いで、毎回工夫を凝らしているのも、次はどんな風になるのか楽しみにしている。

上の作例は実の色とユリの色、ガラス花器の色の繋がりが色彩的効果を生んでいる。同系色の濃淡の組み合わせ。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
9 月号
No. 699

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



暑さに別れを

△2頁の花▽ 櫻子

花材 七竈ななかまど(薔薇科)

鶏頭けいとう(苧科)

花器 陶花器(前田保則作)

ナナカマドは北国きたぐにに多く、ケイトウは南国由来の花だ。それなのにナナカマドの紅葉にはケイトウの秋色がしっくりとよく似合うのが不思議。ケイトウの瑞々しい緑の葉が両者を繋ぐ役目をしてきている。

ケイトウを前へ出したので、ナナカマドを後ろに高く立てた。



山芍薬の葉

△3頁の花▽ 健一郎

花材 山芍薬やましやくやく(牡丹科)

支那油桐しなあぶらご(燈台草科)

花器 鳥耳銅花器

山芍薬は葉を魅せるのが難しい。



一輪だけならまだしも何かの花
と取り合わせたり、もう一輪入
れると葉の美しさが失われてし
まう。ひと節ごとに曲がりやな
んとも言えない葉と葉の空間
そして綺麗な葉を魅せたかった。
格好良く写っている。垂れる支
那油桐の若い実が葉を引き立て
上に伸びる葉が実の魅力を助長
している。



新入りのメイちゃんは、日光東
照宮の「眠り猫」にそっくり。





菊の盛花

△4頁の花▽ 仙溪

花材

糸菊2種（菊科）

スプレー菊2種（菊科）

花器

梅花皮釉陶水盤

（木村盛伸作）

「立花時勢粧」には菊一色の絵図が3点ある。「大中小の品種を彩りよく花形風流に指す」のを理想とするが難しいものだと言われている。（テキスト672）

「立花時勢粧」よりかなり前の「文阿弥花伝書」には「菊ばかりは立てず」と書かれている。何年の隔たりがあるのか分からないが、流祖の時代には園芸文化の発展と共に、菊ばかりで立てることが可能なくらい多くの品種があつたと想像できる。

今はさらに外国生まれの菊も加わり色も形も様々だが、糸菊の繊細さを生かすには優しい雰囲気

の菊を合わせるべきである。





菊一色の立花

△5頁の花▽ 仙溪

花型 菊一色 除真立花

花材 糸菊(菊科)

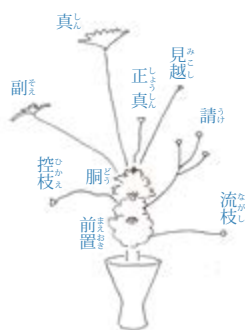
スプレー菊(菊科)

小菊(菊科)

寒菊(菊科)

花器 陶花器

横倒しに育った菊が無い時は、作例のようなスプレー菊の小枝を整理するなど工夫すれば、自然な感じに立てることができる。茎を撓めたところはフローラルテープを巻いて乾燥を防ぎ、葉を長持ちさせたい。



横から見た奥行





除真立花 2作

花型 除真立花

花材 七竈 (薔薇科)

木苺 (薔薇科)

朝鮮槿 (天樞科)

鶏頭 (苧科)

狗尾草 (稻科)

女郎花 (女郎花科)

竜胆 2種 (竜胆科)

小菊 (菊科)

鼈甲桩木 (錦木科) 6頁

桔梗白花 (桔梗科) 7頁

花器 陶花器

△6頁の花▽ 仙溪

稽古で立てた立花。同じ花材で健一郎が立てた立花と比べると自分の生真面目さがよく分かる。

真に深山の木ものを使っているので、見越には山の梢を感じするような花材を選ぶべきだった。「見越」については「テキスト629」を参照ください。

△7頁の花▽ 健一郎

今回は七竈の紅葉があまりにも綺麗だったので真にした。厚みのある真を軸に周りの役えだをこさえていった。鶏頭を正真へと考えたが色が七竈の色と似通っているので白の竜胆を正真にした。全体

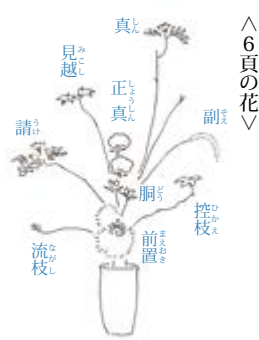


〈7 頁の花〉



〈6 頁の花〉

横から見た奥行



のバランスを見るともう一本足りないところである。課題は山ほどあるが一つずつ向き合っていきたい。

ギンギツネ

△表紙の花▽ 仙溪

花材

葉鶏頭2種^{はけいとう}（苧科）

銀狐の枯花^{ぎんぎつね}（稻科）

スモークグラス^{スモークグラス}（稻科）

花器 陶花器

白い尻尾^{しっぽ}のような穂。花屋に
来た時は緑色だったのが、いつ
の間にか白くなったそうだ。ギ
ンギツネの名前がついていた。
調べるとアフリカ原産のペニセ
タム・ヴィロサムという品種で、
花穂が20センチ以上になりギツ
ネの尾のようなので日本ではギ
ンギツネと呼ばれている。作例
の花穂は10センチ前後だが、一
目見て枯れ色に心を奪われた。
同じイネ科のスモーク・グラ
スを合わせ、小型のハゲイトウ
を加えた。枯れ色の不思議な美
しさが表現できたのではと思う。



『東北旅行』

健一郎

マグカップのように実用的なものを作るためにはどうすればいい。手にならずくなるか考えればいい。手に馴染むもの、形の格好良さを気にするのである。実用から離れたものを制作することはさらに難しいと考えている。それは作品である。これほど曖昧で評価のしにくいものがあるだろうか。

土を使った作品は生け花と違い、無から有を作り出すものかと思っていたが、土があることに気がついた。大きな発見である。無ではなく無限であった。いかにして作品になりうるのだろうか。

土と向き合うことで形が出てくるのだろうか。とても繊細な観察眼で土の表情を見る必要があると思われる。そして気の遠くなるほどの実験が不可欠だ。僕が尊敬している陶芸家の作品を見ているとその登り窯の不確実性と土地の土と格闘しているように見えた。

生け花は生命に命を吹き込む。陶芸は形を作り命を吹き込む。共通しているのは、花、土を生き生きとさせられるかである。そしてこれが命を吹き込む者の技量である。

登り窯の火入れ式に初めて参列した。今回の窯の成功と安全を火の神様に祈願する。火に対する特

別な感情が増幅される空間だった。自分で作った器は入っていないので、想像でしか無いが、窯入れするとき自分の作品は自分の元を離れて火の神様に委ねる感覚なのだろうか。面白い。

そしてこの日から三日間火を絶やさぬよう交代で温度を見ながら薪を焚べていく。そして急な温度の変化で土が割れないように三日ほど窯を休めてから窯出しをする。緊張の瞬間である。窯の中で放り込んだ薪が当たって、形の崩れていた作品が一つだけあった。良い表情をしている。登り窯は電気窯に比べ制御が効かず安定感に欠ける。つまり味を出してくれるわけだ。苦い味であることが大半であるらしいが、時折とびきりの作品が出てくる。

前回は窯を休めている間に1人で松島、遠野、花巻、十和田湖、奥入瀬、等々を巡っていた。1人だと気楽なものであったが、今回は菜月との旅である。食べるご飯にも気を使い、宿も綺麗なところでないといけない。2人で車を借りてゆつくりと各地を周った。

奥入瀬溪流周辺のブナの森林は特別気持ちが良かった。人工的に作られた杉林は例外であるが、自然の群生地ではその植物が気持ちよさそうにしているように思う。他の場所に比べ、他の植物が少ないからか、競争をしているように見えない。のびのびとしている。これ(写真⑦)は菜月が撮った写



①火入れ式後の日。丸3日間燃え続ける。
②デモンストレーションの花『不忘』のお軸と。
③不忘庵にてのデモンストレーションの様子。

真なのだが良く撮れていて、その場の空気が伝わりそうである。気持ちよさそう。ブナ林に足を少し踏み入れるとそこには誰もおらず、人がこれ以上ここにいてはいけない気さえした。神聖で不可侵な雰囲気を感じたのは久しぶりだった。本物をみた。ブナの森林へは道路があつたので立ち入ることができたが、道路すらなかった方が良かったのかも知れないと思わされた。人がここまで本当に立ち入るべきであつたのか。道路があるからこそここまでこれた事実を受け止めることができなかった。

「あー」車でガタガタした砂利道を走るときは2人のお決まりだ。一定の音を出しながら車の振動で音が変わるのを楽しんでいる。奥入瀬ほどまだ観光地化されていないのか道路が整備されていない。青森の市内から2時間ほどで白神山地についた。ブナももちろん綺麗だったが池が印象的であつた。なぜこんなにも青いのか。一説によると純粋な水の色であるからだそう。泳ぐことは叶わなかったが空気を吸って目で堪能した。(写真⑥)

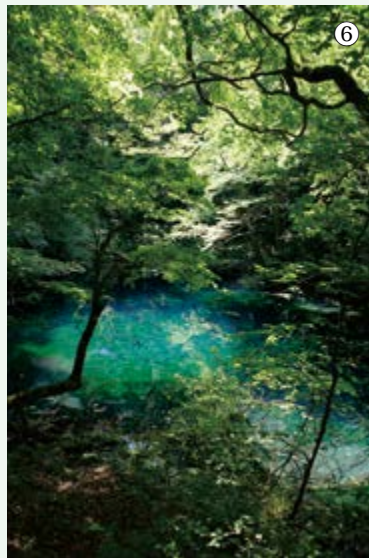
伊豆沼の蓮には驚いた。何周首を回しても一面に蓮が広がっていた。写真(⑧)を見てもわかるように蓮と山と空で画面が三つに分割されている。一切のノイズが、かき消されている。80ヘクタールびっしりと蓮で埋め尽くされていた。甲子園球場の約100倍、京都御苑の約4個半の広さである。



立ち枯れがまじるアオモリトドマツの群生。(蔵王)



ブナ林 (奥入瀬付近)



沸壺の池



奥入瀬溪流



伊豆沼の蓮まつり

古い蓮のようで食用ではないらしい。観賞用の蓮だそう。その中を遊覧船に乗って蓮の花に浸る。写真が悪く、言葉にもし難い。蓮が好きなのは一度は見てもほしい光景であった。極楽浄土には行ったことがないが、こんなところなのだろうか。蓮を観念的に捉えている人からすると浄土のような風景に見えるに違いない。私個人の感想としては、蓮の圧倒的な雰囲気と数にのみ込まれ溺れたような気がした。

道を歩いていると東北の季節にも関心が向いた。七竈の葉は色づき始め、ムクゲの下に紫陽花が綺麗に咲いていた。季節に幅がある。京都の一点に住んでいると季節と季節がグラデーションしているのがはつきりとしている。その常識を持つて東北を歩くと違いはつきりと目がいく。旬に幅があるということは、季節を表現する花も、異なってくる。こればかりは東北で生活してみないとわからないことだが、僕が発信している世界中から寄せ集められた花を使って生ける花に旬はあるのだろうか。無いはずの旬を作る作業をしている時もあるのでは無いかと思う。季節にズレがある事を頭で知っていたが、実際に目の当たりにすると納得する。季節の表現に幅ができた。今を知ること、今を生けることができる。今花を生けることは今を知ることから始まる。私は現在、生けている花のことはもちろん、その環境にも強い関心があるらしい。



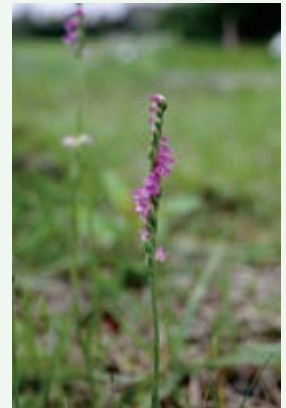
チョウノスケソウ



マツモトセンノウ



コマクサ



ネジバナ



キョウカノコ



ヒメルリトラノオ



エビネラン



ムクゲとアジサイ



ギボウシ

岩手県の安比や、宮城の蔵王、八甲田山など標高の高い場所に訪れる機会が多く、背の低い可愛らしい花にたくさん出逢った。



ヒヨドリと柿

△12頁の花▽ 健一郎

花材 柿（柿科）

ダリア「黒蝶」（菊科）

花器 陶花器

数年前、日本の神様が生まれた土地の空気を吸いに、菜月と高千穂の神社を巡っている道中だった。大きな葉が数枚しか残っていない柿の木に20羽くらいヒヨドリが群がっているのをみつけた。確かカラスも混じっていた。一羽でさえ賑やかな鳥なのに。人は僕ら以外におらず、その場は柿とヒヨドリに支配されていた。忘れられない光景である。花屋でこの枝（前年の実）を見かけた時、ふとその光景が浮かんだ。柿に黒蝶のダリアを合わせた。柿にほとんど葉がないのでダリアの葉が身に染み入るようである。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
9 月号
No. 711

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





植物散歩

仙溪

途中でいろんな花に出合えるのが山登りの楽しみなのだが、それには時間と体力が必要だ。家から日帰りで気軽に自然を楽しめる場所を訪れて、植物散歩を楽しんでいる。

7月には華道家仲間と六甲山高山植物園に行った。コアジサイの紫色の花柄に見入り、ギボシの花の蕾が丸くて可愛かった。

8月には京丹波町和知の「わち山野草の森」を訪れた。九百種の植物が育ち、四季を通して楽しめる。オミナエシが眩しく咲いていた。途中、由良川沿いの田園風景に癒やされ、鮎の塩焼きと地酒も堪能した。別の季節も楽しみである。



㊦ クサギの花が咲いていた。
㊦ 道を歩くカニ。(和知にて)

虫狩の実 菊

〆2頁の花〆 仙溪



花型 草型副流し 二種挿し
花材 虫狩

(忍冬科・連福草科)

菊(菊科)

花器 陶花瓶(伊藤典哲作)

ムシカキは葉を亀の甲羅に見立ててオオカメノキ(大亀の木)とも呼ばれる。初夏ガクアジサイに似た白い花が咲き、晩夏赤い実が黒く熟すころ花柄は赤く変色している。先日山で見たミズキの実も花柄が赤く、遠目では赤い花のように目立っていた。実の存在を山の動物や鳥たちに知らせるための知恵だろう。

菊2色

△3頁の花▽ 仙溪

花型 真の花型

花材 菊(菊科)

花器 陶水盤

水盤に剣山でいけている。比較的粘り強い茎だったので、留・総囲・控は慎重に繞めている。真・新囲・副・胴は繞めずにくいた。

菊の季節がやってくる。菊は花の品格を引き出し、葉をシャキッと見せたい。



リコリス

△4頁の花▽ 仙溪

花材 裏白の木の実(薔薇科)

リコリス(彼岸花科)

スプレー菊(菊科)

花器 採泥陶花器

(宮下善爾作)

リコリスは東アジアの暖地に分布する多年草。鮮やかな黄色の花弁が反りかえり、光を放っているような明るさがある。

黄色から赤に色づき始めた実とオレンジ色のキクを合わせて、色彩の繋がりを楽しんだ。

光る実

△5頁の花▽ 仙溪

花材 酸漿・鬼灯(茄子科)

女郎花(女郎花科)

木苺(薔薇科)

花器 陶花器(市川博一作)

仙齋・素子の「花ふたり旅」スウェーデン編にホオズキをいけた花がある。ガラスメーカー「コスタ・ボダ」を訪れ、近くの花屋で花を買い、コスタ・ボダのガラス花器にいけて写真を撮った。ホオズキは長い茎に実がついたまま乾燥した状態だっ



たのを、色を強めるため束にして実の塊をつくった。

コスタ・ボダ社のゲストハウスの一室。部屋の照明を消し、テーブルに大きな黒いガラス花器を置き、ホオズキとエノコログサを母がいけるのを横で見ていると、窓から差す光でホオズキが輝きだした。枯れてカサカサだったホオズキが生き生きと蘇るのを目の当たりにして、いけばなの力に圧倒された。

この花を何と合わせ、どんな器にいけ、どういけるか、いけた花をどこにどう置くかで、花の個性がキラッと光ることを教わった。私の大切な思い出である。

明かりが灯ったように見せたくて、黒い背景に黒い器で立派なホオズキをいけた。長く使ったがよく水を吸い上げている。緑をキイチゴで補い、オミナエシで光を広げた。

璣瓊鬼灯

△6頁の花▽ 健一郎

花材 璣瓊鬼灯（茄子科）

仙翁（撫子科）

白花鳥兜（金鳳花科）

花器 陶花器（野中春清作）

江戸時代に日本で作出された園芸品種で、鉢植えで栽培されている。種子ができないため、株分けで増やすらしい。作例はまだ色づく前のもので、色づいたものより、不思議な萼に目がいく。江戸時代に競って品種改良された朝顔を思い起こさせる。国中が花に興味感心を持っていた時代のことを考えているのは面白い。その時代に良く流通した仙翁花と山の鳥兜と取り合わせた。何度見ても不思議な形の花だった。



【訂正】

7月号・6頁の花

花器 白釉壺（崔龍熙作）



ベロニカの小品

△7頁の花▽ 健一郎

花材 エンシクリア（蘭科）

ベロニカ（胡麻葉草科・
車前草科）

花器 小物入れ（モロッコ）

団子のように固まった形をす
るトラノオ。想像するトラノオ
とは全く形が違う。一週間ほど
かけて咲いてゆくであろう花も
ほとんど全てが咲いた。予定し
ていた30分の花火大会が何かの
手違いで1分で終わってしまった
たかのようにだ。花屋で会うとな
ぜか手にとってしまう。今回は
この二輪のみ残っていたので頂
いた。トラノオらしい形をした
ベロニカは、和の花とも合うが、
奇形とも言えるこのベロニカの
強さを見てエンシクリアと合わ
せた。



羅漢図の插花

仙溪

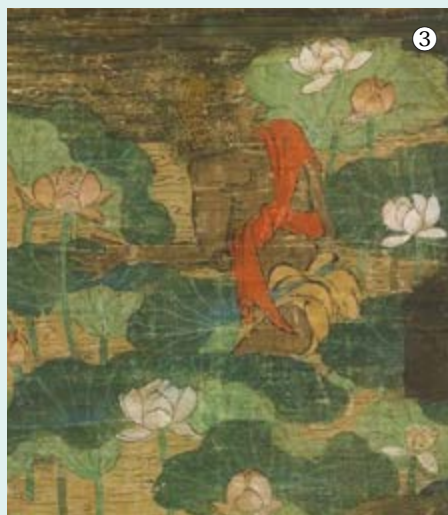
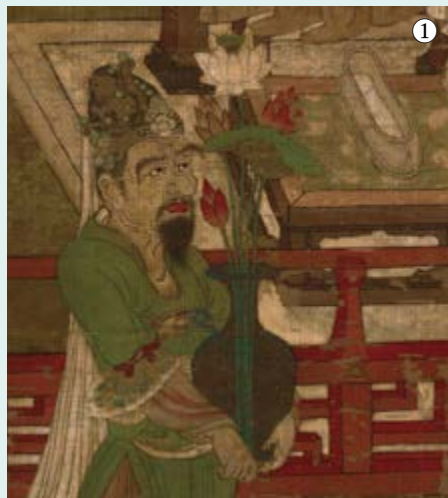
羅漢とは「修行を完成し、供養に値する者」を意味する「アルハット」を漢字音で表した「阿羅漢」の略称で、釈迦

の入滅後に長寿を保ち法の護持と人々の救済を釈迦から託された16羅漢や、超人的な能力を持つ聖人達のことをさす。平安時代中期から鎌倉時代に中国から十六羅漢図などと共に羅漢信仰がもたらされた。

平安末期に日本で描かれた十六羅漢図（11世紀）には、ハスの花葉を挿したガラス花瓶を抱え持つ従者が見える（①②）。伝来の絵を元にしたのら、中国北宋時代にはこのような供花が行われていたもの

と想像できる。前に紹介した遼の墓所（1116年）に瑠璃瓶に挿された供花の絵が描かれていたことも繋がりを感ずるし、日本においては鳥獣人物戯画（平安末〜鎌倉初）にハスの供花があり興味深い。

戦乱によっても衰退しかけた仏教は、宋代に庇護をうけ再興する。明州には禅僧の栄西や道元も訪れ、大陸の文化を吸収して日本へ持ち帰っている。仏教復興の時代に日本や高麗と交流が続く明州で、この羅漢図百幅は10年以上の歳月をかけて描かれた。



別の羅漢図には蓮池でハスの花葉を採取し、青磁の花瓶に挿して仏に供える場面がある。中国・南宋時代に明州（現在の寧波）で描かれた五百羅漢図・百幅の一つだ（③④）。明州は古くから海上交易の拠点として栄えた港湾都市で、702年以降の遣唐使船もまですこに上陸して唐の都、長安（現在の西安）を目指した。唐代後期の廃仏法難以後、

蓮池の描写は南宋の都・杭州（当時は臨安）の西湖を彷彿とさせる。杭州は明州のすぐ隣だ。明州にも東銭湖などハスは身近にあったと思われる。気候おだやかなこの地域（江南地方）では、実際にハスを花瓶に挿して供えていたのだろう。彼の地で修行中の栄西や道元もハスを切って花瓶に挿したのだろうか。



十六羅漢図（国宝）の一つ。11世紀。聖衆来迎寺伝来。東京国立博物館蔵。
出典①②： https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100157&content_part_id=016&langId=ja&webView=e 国宝サイトより転載



五百羅漢図 100幅の一つ「採蓮」。12世紀後半、明州の恵安院（東銭湖畔の寺院）に施入。現在は京都大徳寺他に伝来。
出典③④： <https://kknews.cc/news/o9ok5b6.html>



「なんかええな」

△表紙の花▽ 健一郎

花材

夏櫨 (躑躅科)

夏櫨 苔木

犬蓼・赤飯 (蓼科)

沢枯梗 (桔梗科)

仙翁 (撫子科)

竜胆 (竜胆科)

女郎花 (女郎花科)



白花鳥兜 (金鳳花科)

襖萩 (襖萩科) ピンク

萩 (豆科)

宝鐸草 (百合科)

梅苔木

花器 銅砂鉢

苔の豊かな木を探してはいるのだがなかなか見つからない。先日、庭師さんのトラックで見つけた苔がべったりとついた樹齢70年くらいの梅の切り株を頂いた。特に何かを見越して頂いたものではなかったのだが、季節の砂物によく合った。苔がよい景色を作っている。真の隠しは平安神宮を散歩していたときに拾った松の皮。層を眺めて感心し、部屋に飾っていた。模様が綺麗だ。これも何かを考えての物ではなく、好きな石を持ち帰るような感覚である。小学時代に良く石を集めていたのだが、何か自分に強く反応させるものを集めることが最近増えた。「なんかええな。」という感覚は忙しい時間の中で見過ごされやすいが、ゆったりとした時間に生きているとよく味わえる。なんかええなと思った季節の花を一つの砂鉢に出合わせた。いい景色だ。



レモンとメイ

蓮の立花

花型 蓮一色

花材 蓮 (蓮科)

健一郎

花器 手付陶花瓶

上野淳泉先生の教場にて。
8月21日。(倉敷市)



蓮の立花

健一郎

お盆も終わり、花の出荷が終わった後の蓮畑で、好きなだけ蓮を切らせてもらって立花を立てた。僕にとって初めての蓮一色である。前の日までは雨が降っており、蓮の葉は日光で傷んでない。お水も良く吸っている。当日は曇りで、蓮の花を切り取り終わると雨が降ってきた。

ハスの立花をする上でこれほど恵まれた環境はないだろう。以前の河骨の立花を立てたときにもお世話になった先生をはじめとし、たくさんの方先生にお世話になった。立てた立花を最後に13世家元の愛弟子である95を迎えた大先生に拝見して頂いた。

曇りのため、朝6時から蓮を取りに行く。辺りはまだ静か。畑には一面に蓮が広がっている。長靴、レインコートを装備し、真になりそうな葉から取りに行く。奥の方にいい葉がある。目がけて分け入ろうと沼へ足を踏み入れると足が沈む。ハスの方が背が高くなった。見上げると蓮の葉で周りが見えない。先

ほど見つけた良い葉はどこへ行ったかわからなくなる。大きな葉の下には巻き葉がある。役枝にしようとは考えず、綺麗だったので切り取った。蓮はどの段階で、いつ見ても雰囲気があつて面白い。綺麗な葉、花を探してどんどんと奥へ分け入る。花の香りがした。甘くすーつとする香りだ。私はいまハスの中にいる。まるで蓮に溺れているかのような。足が抜けなくなる。そうになるが、なんとか歩く。無理して手を伸ばして綺麗な蕾があつたので頂き引き返す。その拍子に蓮を切る音が聞こえた方を見ると女性の先生が慣れた手つきでズバズバと葉と花を集めているのを発見した。まだ僕はあそこまで行けそうにない。きつと、歩き方や装備の違いであろう。倉敷の先生方は毎年の恒例行事を心から楽しんでいて。

手早く花を取り終え、生ける場所へ持ち帰る。水揚げをしながら花を立てていく。河骨の立花のときにもお世話になった先生についてもらい、脈々と受け継がれる技、感覚を吸収する。結局は触るしかない。

家に帰り着くと、95を迎えた大先生から電話がかかってきた。蓮の安否の確認、僕の安否の確認、京都から来てくれてただけ嬉しかったか、蓮にとつて京都で他の人に見てもらえることがどれほどの幸せであろうか。大先生自身が自分が蓮であるかのように何度もお礼を頂いた。きつと大先生は蓮の代わりとも思っていないだろう。お礼を言おうとしていたはずの僕が勢いに飲み込まれてしまった。

蓮ちゃんにもよろしくね。と、電話は終わった。大先生と花の境界線が曖昧で、ぼやけている。ましてや今回大先生はハスに触れてさえないのに。終戦後18

歳から花の道に入り、没頭。花だ。本当に楽しそうにその当時に厚みを持たせるべく油絵、書道の、大工仕事を勉強する。未だ。私も思いつきり、この生を堪能したい。



同砂之物

花伝書を見る

菊一色 砂の物

専定寺（富春軒・初版）

菊 小菊

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

「砂の物」にも真行草がある。二株立てで、男株と女株に軽重がないように立て、どちらにも正真と前置があるものを「行の砂の物」という。

この図「菊一色砂の物」は男株と女株の軽重が自由で、二株であっても正真一つ、前置一つなので「草の砂の物」である。

「株立は異曲風流に意気はづみを第一として立てるが、とりわけ草の砂の物では、一手珍しき作意がなければ叶わない。」と富春軒は書いている。

向かって左の株から真の菊が右側に除いて出ている。普通なら左に除いて出るところ

を逆にすることで意外性を生んでいる。「珍しき作意」である。

挿花の神髄を習得した上で、定石にこだわらない自由な精神が備わってこそ「一手珍しき作意」は生まれる。



専定寺



クロトンの木

△12頁の花▽ 桜子

花材 クロトン（燈台草科）

カラー（里芋科）

アンスリウム（里芋科）

花器 銅器

稽古でいけるクロトンは一枚ずつの葉としていける事が多い。水上げが悪いので、足元に添える葉として売られている。トウダイグサ科の植物なので、先端が黄、赤、オレンジ色に染まり、葉脈がくっきりと美しい。葉の形が槍の先の鉾（ほこ）に似ているので鉾葉系と呼ぶそう。今回は鉾のクロトンの木を切らずに根のまま包んで銅製花器にいけてみた。花器の口も中也広くてすっぽり包み込む大らかさ。根ごといけたのでよく保ってくれている。暑い時期で保たない花が多いが、取り合わせを色々替えながらお玄関の迎え花として飾っている。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2023 年

9 月号

No. 723

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





七竈の赤い葉

△2頁の花▽ 仙溪

七竈

(薔薇科)

秋明菊(金鳳花科)

瑠璃虎の尾(胡麻の葉草科)

陶水盤

青葉に赤や黄に色づいた葉が混じっているのを「わくら葉」と呼ぶ。信州の森で撮った写真にも写っていた(左)。虫などによる自然現象だが、この仕組みを利用してナナカマドの切り枝を人工的に紅葉させることができる。作例の盛花は真夏にいたが、一週間以上元気だった。自然では実の方が葉よりも先に赤くなるので見分けがつく。



横から見た奥行



蓼科で8月24日撮影



夏の収穫

△ 3 頁の花 √ 櫻子

鷹の羽薄たかのはすき（稲科）

粟あわ（稲科）

透かし百合うり（百合科）

ズッキーニ（瓜科）

アケビ手揚げ籠

今年の夏も厳しい暑さだったが、旬の果物や野菜は沢山売られていて毎日煮物、漬物、炒め物、サラダ、ナムルなどを作っては食べていたので夏バテにもならず健康に暮らす事が出来た。

お弟子さんから畑で育てた巨大なズッキーニをいただいたので、アワの若い穂とアケビ籠に取り合わせた。昔はこのアケビ籠で錦市場に買い物に通っていた事を思い出す。今は荷物が多くてリュックに代わったが、それでもこの籠を見ると沢山の花を盛り込みたくなる。

アワ、スカシユリ、ズッキーニ（入らない！）、重く見えてはいけけないのでタカノハススキをいけて。





流木・晒木
りゅうぼく しやれぼく

△ 4 頁の花 ∇ 仙溪

胡蝶蘭 2 種 (蘭科)
ことうらん 2 種 (らんこ)

棕櫚竹 (椰子科)
しゅうちゅうく (やしこ)

蠟梅の根塊
ろうばいこんかい

ガラス花器

この塊はロウバイの根と聞いている。何とも味わいのある形だが、ここまで特殊でなくても、流木や晒木を園芸店などで見つけたら、気に入った形のを手に入れておくといい。作例の白い蘭は鉢植で買ってきて根を洗って根つきでいけている。剣山に立てた支えに括っているのが剣山を隠すものが必要になる。そこで流木などが役に立つ。自然でもコチョウランは木や岩に根を這わせて咲いているので、良い景色をつくつてくれる。

庭のシュロチクの若葉を加えて、黄色いガラス器にいけた。南の島のイメージ。





女郎花

△ 5 頁の花 ∨ 櫻子

女郎花 (女郎花科)

スモークグラス (稲科)

薔薇数種 (薔薇科)

陶花瓶 (竹内眞三郎作)

初秋の明るさをいち早く感じさせてくれるオミナエシ。敗醤という別名(生薬名)があるのは、花が古くなると醬油が腐ったような匂いがするからだ。でもそんなことはお構いなしに、いつも秋にはオミナエシを楽しみに待っている。

いける時に気をつける事は

① 出来るだけ風通しの良い場所に飾ってあげる事。

② 水をこまめに替える事

③ 長くて軸の太いものを選べば、1、2本でも存在感があるので少ない本数で他の花と取り合わせる。

絶滅危惧種にも指定された花なので、今手に入るものは殆どが栽培種だが、秋の七草として長く飾ってあげたい。

バラ農園で咲きはじめた夏バラと合わせて。





二重切りの生花

△ 6 頁の花 ∇ 健一郎

上溝桜の実 (薔薇科)
りんどう

竜胆 (竜胆科)

二重切竹筒

青い葉の雪柳と竜胆で二重切りに生けて飾っていたが、雪柳の葉が散り、撮影用に上溝桜を生けた。印象がまるで変わり、竜胆の見え方と季節が変わった。選ぶことができたなら煤竹の二重切りに生けたいところだが家にはない。ないものを感じるようになったことも一つの成長ではないかと思っている。だが白竹の映りも軽やかで、上溝桜の実が熟す時期の早さを考えると、これで良いのではないかと納得している。



乱れ桔梗立花

△ 7 頁の花 ∇ 健一郎



桔梗2種（桔梗科）
 仙翁（撫子科）
 沼虎の尾（桜草科）
 萩（豆科） 流木

青磁花瓶（清水卯一作）

仙翁とともに、桔梗の蕾、花、実、茎ぶりを見て好きなものを花フジの山で切らせてもらった。生えているところを知っていると生ける時にも影響が出る。少し前までなら役枝のイメージを思い描いてお花を選んでいたが、このところは面白いものをすぐって頂いている。当初は花瓶を前にすると困ったが、そのお花に惚れ、観察していればいつの間にかどうにかなるものなんだと思うようになった。

正真の沼虎の尾は花フジのとし子さんが福井県から持って帰ってきたもので、良い景色になりそうだったのでそのままいただいた。



ヒトと人

健一郎

終介が産まれてからずっとそばにいる。オスとして些か奇妙な行動をしている事は認識しており、むず痒さもある。頭では外へ出て狩りにでも出かけなければいけないとは考えているが、育児休暇という制度を使っている。今も終介の側にいる事ができている。

共に過ごす時間は、なんと幸せな事か。妻に怒られながらではあるが、そばにいる事を許してもらっている。妻は母として自立し、以前よりも逞しさに拍車がかかり、安心できる。すくすくと育つ時に気をつけたいと思っているのが環境である。言葉、規則、慣例から程遠いところでゆつくりとしてから、自分のペースで人間の生活を楽しんでもらいたい。これが僕の考える、とびぎりの贅沢だ。

ここ最近、霊長類としてのヒトの機能的な事柄に興味がある。終介を迎えるにあたり、調べ物は一切していない。反応をそのまま楽しんだ。今は新生児期が過ぎたのでこの期について調べてみるとおもしろかった。新生児には様々な原始反射が見られる。例えば産まれてまもなく

い赤ちゃんも哺乳反射というものをもっている。赤ちゃんの口に入ってきたものを吸う反射能力だ。母乳を吸うのに大切な反射だ。出産後すぐに授乳していたのには驚いた。そして、掌に物が触れると握りしめる、掌握反応もその名残の一つである。今の赤ちゃんには必要でなく、一般的に3〜4ヶ月で自然に消滅するらしい。体毛があつた頃に必要だった反射の名残で、赤ちゃんは親の体毛につかまるためという説を見て納得した。

毛は森の中で体温を保つのに役立ち、暑い時は熱から身を守った。人は毛を失い、気候が変化し、動物の生息地が変化した結果、我々の祖先はサバンナに移り住む。二足歩行を始めた。直立二足歩行により、脳を下から支えられるようになったので脳を大きくすることができた。太陽にあたる面積が少なくなり、目の位置が高くなったので遠くを見渡せるようになり、エネルギー効率も良くなった。前足は道具を使うものに役目が変わり、多くの食べ物一度に運べるようになった。そしてそれぞれの事柄は互いに影響しあっている。

なぜ人は重い赤ちゃんを産むのか。脂肪率は類人猿の五倍である。その脂肪は脳を作るため

のものらしい。新生児の脳は三段階で成長するという。1年で2倍、5年で大人の90パーセント、12歳から16歳で完成するそうだ。その一つに類人猿に見られる食物分配が注目されている。人間はその場で食べずに持ち帰り仲間と分配し、共に食べる。そして見えない物を欲望することができるようになった。速力の劣化、俊敏性の減退、木登りの能力と消化能力を減少させ、共感力増加に基づく社会力を選んだ。長距離歩行、器用な手、食物の運搬が共感力に作用しているらしい。そして共同での子育ても促すだろう。それらは互いに影響しあい脳の大きさにも影響を与えていると思われる。

狩猟を行うようになり、走ることを覚えた。体毛を失ったことが功を奏し、汗をかき運動をする生活様式になる。残った髪の毛は熱の持ちやすい脳を冷やすために生えている。ヒトは他の類人猿と比べても多くの汗腺を持つているため、十分な体温調節をすることができ。体を動かす欲求も多くの汗腺が作用しているからかもしれない。

先週より溪の滝を見に行つた。終介はまだ近くで感じているだけだが、いつか一緒に飛び込みたい。裸足で水の中に入っている

と度々足の裏を切る。そのたびに人が川や海での生活に適していないんだな、と感じる。木のぼったり、ぶら下がったり、身体を通して自分が自然の中の生活に適してはいないことを実感する。ヒトは自然の中での生活から離れて久しい。昨日は蓮を切り沼地に入り肌が露出していた箇所が他の葉で切れていたりした。泥だらけだったがそのまま新幹線に乗り帰るのは気が引け、着替えてから帰った。

我々の祖先も、家の猫も恐怖を感じたら、毛が総立ちになる。体を大きく見せることが意思表示にもなる。この毛を立てるための筋肉はヒトにも備わっている。我々は鳥肌を立てることができ。衣服を纏いほとんどの毛が減少した。今の生活様式に必要な反応ではないが身体に残っているものの一つで、他にも尾椎骨も尻尾の退化したもので、いずれも自然の中で生活していた名残である。蓮池の蓮も先祖返りして白い蓮、八重の蓮、一重のものなど様々であった。尾椎骨の生えた人間が生まれることもあるそうだ。地球は遠い時間と生物の面白さで満ち溢れている。研究する気にはないが、見たり聞いたりするのは好きだ。

霊長類の中でもゴリラやオランウータンなども含む類人猿は早期に顔の毛を失ったという。表情を使つて我々は意思疎通をしていることがその原因としてあるそうだ。その中でも目の情報是非常に大きい。目に関する慣用句や諺が多いのもそのためだろうか。人に関して言えば視覚からの情報が8割ほどであるという。そして相手の目からも多くの情報を得ている。人は人の中で生活するにはたくさんの人の顔から無意識に自分の行動を決めてしまっているのかもしれない。産まれた頃から終介を見ていても人によつてコロコロと態度をかえ、7ヶ月を過ぎると、相手の喜ぶことを探して何かをする仕草が増えたように思う。大切なことだが一方で自分の世界の中に入り込めるような環境作りも夫婦でしている。今日も妻が洗濯物に夢中になる終介の動画を見せてもらった。良い表情である。多少危なからうと、本人の主体性を守り、没頭できる場を作れる母親は本当に凄だと思う。

人以外の動物は絶対音感を持つているらしい。言葉を解釈する上で音程は重要視されず、一音一音の意味が大切になる。音程に気をつけて話を聞くと、

言葉が聞き取れない。自然と絶対音感とは崩れていく。音楽に携わっていると、その感覚が衰退することを止めることができるのだろうか。音楽に携わっている人に絶対音感を持っている人が多い。

音階は音を記号化したものである。一方でノイズともいわれる音達も存在する。ノイズも音階に当てはめることもできるらしいが、無理に音階に当てはめなくてもいいのではないかと思う。言葉に関しても話す言語からはみ出た言葉は、ただの音である。

幼児教育の世界ではよく、「ぴちぴちや」「ざざざあ」などのオノマトペの効果が期待されている。言語の中ではまだノイズに近いから注目されているのかもしれない。言語とただの音の間にあると思っている。言葉以外の音を口からも出すように心がけているのだが、これが難しい。ヒトとしての感覚に磨きをかけたい。

たくさんさんの音に囲まれて、汗をかくことを楽しみ、脳を充分に使って考え、人との関わり合いの中で自立をし、精神的に豊かな生活をおくり、善く生きて欲しい。些か願いすぎか。自分も目指すところである。



岡山・流枝会で蓮の立花

華老の上野淳泉先生指導のもと、今年も早朝から蓮を採って立花を立てられた。右の写真は健一郎が立てたもの。なかなか味わい深い蓮一色だ。 仙溪



真夏のメイとレモン





水の景色

△表紙の花▽ 健一郎

匙沢瀉（沢瀉科）
さじのあざみ

水葵（水葵科）
みずあおい

編芦（稲科）
あしな

煤竹肩切魚籠
すすだけかたきりびく

お弟子さんが花展で他流の水辺の景色生けを見て、「僕やつたらあそこに竿投げたいですもん。とか思っちゃいます。」と言っていたのを記憶している。僕にはできない見方である。それだけ実際の景色のポイントを絞って抽出した面白い物だったのだろう。

今回水辺の景色を生けるにあたり、水盤で生きたい気持ち

グッと堪え、魚籠での投げ入れを試みた。人と水辺のの情景である。釣りの好きな義父さんによく琵琶湖に連れて行ってもらった。慣れれば距離は近く感じるようになった。山ではなく湖の植物たちを見ることができるようも面白い。ボートで好きなところに連れて行ってもらいゆっくりとした時間を共に過ごしている。

オモダカは頭が重く固定が難しかったので足をつけている。銅の落としに配りかけるとすぐにお花が止まった。オモダカのお花が小さく可愛らしい。

徳島に訪れて

健一郎

徳島の気候で育った力強い花々と機転と場を巻き込み、確かな技術が見られた気持ちのいい花会だった。様々な文化と花があるのも良かった。武田先生と50年伴走した企画の藤原さんからお話があった。

「家にかかるような玄関にお花が飾ってあって上がるとお床があってお軸がかけてある。その横の違棚には壺が飾ってあってな。全部で一つの作品になつたよ。やけん、そんなふうに出場の設えもできたらって思ってた。みんなで形にしたんよ。ほでな、展覧会とかなくやつてるけどな、お花がないとあかんのや。生きてるもんがこう繋いどるからかな？絵とかでも抽象的であつたらあるほどう、入れんのや。やけどなお花が繋いでくれんねん。器だけでもな、あかん。見たことないお花でも見たことあるお花でも関係ないんよ。」

本当にそうであるか私が判断できる事ではないが、伺ったことに覚えはあつた。言葉に時間の重みと強い感情を感じた。その人の力である。

花展を楽しんだのち、武田慶

園先生の娘さんとお孫さんに徳島のほんの一部を紹介していたのだが、訪れた各箇所での文化の匂いを感じた。次回はゆつくと周ってみたい。

お孫さんは私と同じ歳で好奇心が強い。矢野陶園さんで見つけた置き物を見て、「可愛い。」と楽しんでいた様子に心が和んだ。純粹で真つ直ぐ。それは健康的でとても良い入り口だと思う。作家の名前や名品と呼ばれたものにしか興味がないのとは対極にある。好意の感情から、見立てるきっかけが芽生え、それぞれの文化が実生活に溶け込んでゆくのだろうか。様々な発見があつた徳島の日だったが、多くの方にあなたたく迎えられ、初対面の方ともなぜか懐かしさを覚える時間を過ごした。



花伝書を見る

菊の一色（行・初版）

富春軒

菊 小菊

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

がもともと備わっているから
だろう。風に倒れてもそこか
ら立ち上がる姿。土の中にしっ
かり根を張って風に立ち向か
う姿。そういうクセのある姿

一色物には独特の雰囲気がある。過去に見た景色と重なる感じ。他の立花と比べて、より自然な印象を強く受ける。富春軒の一色物は正にそこに生えているようで、人の手を感じさせない。

そう感じるのは何故だろう。おそらくどの花にも強い個性

を絶妙なバランスで各所に配置し、しかも全体が自然な味わいを損なわない。どの一色物も、命の輝きにあふれている。



富春軒



涼をもとめて

△12頁の花▽ 仙溪

アレカ椰子（椰子科）

ヘリコニア・アンドロメダ

（芭蕉科）

クルクマ（生薑科）

ガラス花器

鳥の羽根を大きくしたようなアレカヤシの葉は、その隙間からそよ風が吹いてきそうだ。1本の姿もいいが、数本を前後に重ねるとダイナミックな造形空間が生まれる。じっくり考えるのもいいが、水際ぎりぎりに葉がくるよう無造作に立ててゆく。

相手には南国の花が良く似合う。それらをアレカヤシの葉と葉の間に配置してゆく。足元が見えるので、剣山を小石で隠し、たつぷりの水を入れると水際も見せ場になる。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
9 月号
No. 735

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





稲科植物の花穂

△2頁の花▽ 櫻子

パンパステラス（稲科）

ローゼル（葵科）

アナベル（紫陽花科）

陶花瓶

各地で稲穂が実り、ススキをはじめ様々な稲科植物の花穂が風に揺れる季節。表紙では2種類の花穂を軽やかに籠にいけ、ここでは雄大なパンパステラスの花穂をたっぷり厚めにいけた。

ローゼルの赤い蕾で花穂の白色が際立つ。ただ、どちらにも緑がない。悩んだ末に大輪のアナベルを加えた。四角い器で丸いアナベルを浮き上がらせた。



韓藍の花

△3頁の花▽ 仙溪

鶏頭（莧科）



われもこう
吾亦紅（薔薇科）

煤竹籠

韓の国から来た藍染めの花なので韓藍（からあい）と呼ばれたと覚えていたが、藍色に染まるわけではなく、藍の葉を衣に折りつけた（折り染め）色と似た色が鶏頭の葉でもつけられたのが由来だそう。色は葉の緑色。衣に草花の色を折りつけるのは神聖な気を帯びるためだろうか。



帰宅を待ってたみたいに部屋へ来てくつろぐニャンズ。





七竈 直真立花 仙溪

七竈 (薔薇科)

鹿の子百合 (百合科)

竜胆 (竜胆科)

檜扇 (菖蒲科)

手毬下野 (薔薇科)

小菊 (菊科)

小海老草 (狐の孫科)

陶花瓶

今では珍しくなってしまうた

カノコユリが売られていたの

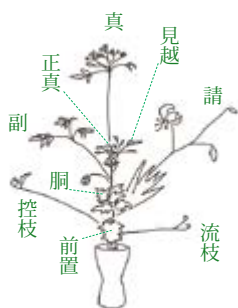
で、立花の請に使った。貴婦人

のような美しさがある。ヒオウ

ギを添えると景色になった。写

真では胴が弱く見える。数日後、

胴を赤いケイトウに替えて良くな





檜葉の生花

健一郎

檜葉（檜科）
ひば（ひのき）

銅花瓶

ヒバの香りに包まれながら
いた生花。花屋で見つけたとき
は、お盆のために集められた花
材に見えていたが、これを生花
にすると、一本一本のその枝の
良さが引き出され、魅力的に見
える。本当によく考えられた、
自然から生じた型であり、いけ
ばなの力である。

饗養文の強く重たい印象に合
わせ、胴のあたりの葉は軽く整
理する程度にし、葉の力強さを
意識した。同じ種類の花材を生
花で生けたとしても、器によつ
て敷板の有無や、周りの空間に
よつて花形だけでなく、残す枝
や捌く枝も大きく変わる。





杉玉とダリア

仙溪

ダリア2種（菊科）

レモンリーフ（躑躅科）

杉玉

陶花器（崔龍熙作）

写真の茶色い球は杉玉で、酒の神様に無事に美味しいお酒ができることを願って酒蔵の軒先に吊される。酒林（さかばやし）とも呼ぶ。杉は酒造りに欠かせない神聖な木なのだ。はじめ緑色の玉が一年たつと焦げ茶色になり、また新たに作り替えられる。

陽数（奇数）が二つ重なる九月九日重陽節。旧暦では菊の季節なので菊にまつわる習わしが今に伝わる。沖縄では菊の葉を三枚入れた器に泡盛（あわもり）を注いで神様ご先祖様に供え、そのあと集まった人達でいただくのだそうだ。

戴いた杉玉にダリアが似合うと思っただけだが、見てみると美味しい日本酒に菊の花弁を浮かべて飲みたくなってきた。食用菊で菊酒と洒落（しやれ）てみるかな。





散歩道の楽しみ

△表紙の花▽ 櫻子

西播蜀黍 他 (稲科)

青薄 (稲科)

広葉杉 (檜科)

菊「チスパ」(菊科)

宗全籠

数種の稲科植物を混ぜいけ、コウヨウザンの枯れ枝を加えたところに、個性的なキク「チスパ」が命の輝きを強めてくれた。コウヨウザンは散歩道で拾ったもので飴色の光沢が美しい。枯れ色で季節感が深まった。



①

桑原健一郎華道教室

いけばな展 「余韻」

会期 10月25日(金)公開いけこみ

26日(土) 9時～17時

27日(日) 9時～15時

会場 鹿王院

昨年、軒号の引用元と思われる杭州の富春山へ散歩し、花をいけたり、その場で郷土料理と共にゆつくりと時間を過ごしていました。江戸時代に、流祖が目指した気韻生動な在り方やいけばなは、中国文化に對しての尊敬の念があったと想像しています。富春江を歩いたり、その場にいる人たちの交流で感じました。そして内省的になり、自分が育った風土と比較し、自身に強く影響していることを認識しました。

中国では、響きを聴覚で感じ取り、内なる生命の脈動が伝わるものを優れたものとし、日本では響きを「にほひ」から感じ取り、生命の艶や色気を感じ取れものを魅力に思うそうです。

今まで漠然と、生き生きとしたいけばなを模索していましたが、振り返ってみると中国的な生命の純粹さや、気品の高さを目指していたようです。

近頃は、それらを意識しながら、薫る生命の色や、つやに興味が出てきました。

お弟子さん達と共に、それぞれの道を意識し、稽古を共にしてまいりました。まだまだではございますが、それぞれが醸す色気、すなわち生命の勢いを、皆様の感覚で楽しんでいただけたら嬉しく思います。

鹿王院の空間、そしていけばなの響きから生まれる余韻を、感じ取りに是非いらしてください。

健一郎

菊之一色

花伝書を見る

立花 菊一色

「菊の一色（真：初版）」

桑原次郎兵衛

菊 小菊

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



桑原次郎兵衛



△ 8 頁の立花図▽

ひよろりと立ち昇る真を頂点にして、徐々に個性を色濃くしながら四方へ広がる菊たち。個々のリズムが美しく纏め上げられている。

「秘曲の図」は40図あり、うち富春軒24図、次郎兵衛9図で殆どがこの2人の作である。

菊 3 種と赤い実 仙溪

藪山査子(雪の下科)

菊「セイフエスト」(菊科)

糸菊 スプレー菊(菊科)

木苺の紅葉(薔薇科)

陶花瓶

昨年11月4日の稽古花を3日後に撮影。固かった糸菊の花弁が伸び広がり神々しくさえ感じる。そんな菊の季節がもうすぐやってくる。





『玩菊図』明 陳洪綬 台湾国立故宮博物院所蔵

出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト

陳洪綬（1598～1652）は明末清初の文人画家。独特の画風は後世に影響を与えた。6月号の『仙人献寿図』も彼の作。

中国の挿花

⑩

仙溪

9月に因んで菊の挿花を。

明代末の『玩菊図』には、岩の上に置かれた花瓶に黄葉した柿の枝と白菊が挿されている。それと向かい合う人物は長い杖を持ち、奇妙な形をした自然木の椅子に座っている。（図①）

台湾故宮博物院の解説ではこの人物のことを「高士」と表現している。調べると、志が高く立派な人格を備えた人物、人格高潔な人、世俗を離れて生活している高潔な人物、隠君子、のことである。流祖、富春軒仙溪が思慕したであろう後漢初期（1世紀）の隱者・

嚴光（厳子陵）のような人のことだ。解説には「菊を愛した陶淵明（365～427）を彷彿とさせる」ともある。

陶淵明も職を辞して故郷に戻り、自ら農作業に従事しつつ生活に即した詩文を多く残した人物である。

この絵をじっと見ていると、自分が絵の中の人物と入れ替わって花と対話しているような気分になる。自分がいた花から何かを教えてもらっているような感じがした。

「菊は隱遁と君子の高尚な品格を象徴し、絵の中の人物は単に花を愛でているだけではなく、自然に近づくことの追求を反映して、物と自己との一体

③



『画院画十二月月令図・九月』（図④）の部分。 籬（まがき）に菊の植え込みが並び、主に女性と子供が楽しんでいる（図②）。 船に菊鉢と酒壺を積んでやってきた人とそれを出迎える人（図③）。重陽節に自慢の菊を持ちよって菊酒を飲み詩を詠む。



『画院画十二月月令图・九月』清 台湾国立故宫博物院所蔵 出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト

清朝皇帝の離宮・円明園を舞台に十二ヶ月それぞれの行事や生活の様子が描かれた十二幅の軸の1つ。円明園は1709年に庭園ができた後、様々な建物が増築され、噴水や西洋楼も建てられたが、1856年第二次アヘン戦争以後、他国による略奪と破壊、さらに文化大革命をへて荒廃した。現在は重点保護文化財の指定をうけて修復を進めつつ、多くの観光客が訪れている。

性の境地にまで昇華します。」と解説にある。中国文人の心の有り様を深く表現した文章だと思う。挿花図を探すうちに、華道の深奥に通じる言葉に出会うことができた。

清代前期の『画院画十二月月令图・

九月』には重陽節に菊を愛でる様子が壮大に描かれている。(図②③④)

北京北西の離宮、円明園を舞台に十二ヶ月それぞれの行事や生活の様子が描かれた十二幅の軸の1つだ。

九月九日、重陽節。災厄を避ける目的で菊酒、茱萸、登高(登山)という

風習が漢代から始まり、唐宋の頃には文人雅士の飲酒、賞菊、登高、賦詩を行う節日となった。

絵には菊の植え込み(図②)や鉢植(図③)が描かれている。船で菊の鉢を運ぶ様子や、今まさに菊会に船で到着した場面も。船には酒壺も積まれて

いる。挨拶を交わす人。楽しいな会話がある。挨拶を交わす人。楽しいな会話がある。挨拶を交わす人。楽しいな会話がある。

菊を愛でて酒を酌み交わし詩作する人たち。画面奥の裏山ではピクニックを楽しんでいる人もいる。

日本の江戸時代中期頃か。隣国の花事情が緻密な絵から想像できる。

葡萄の季節

健一郎

ななかまじ

七竈（薔薇科）

葡萄（葡萄科）

斑入り野葡萄（葡萄科）

カンツイ（角杯）

今年の三月にスイスの自然を訪ね、その土地の花を生け、その土地の人と関わり、没頭するように味わった。そしてスイス固有品種のワインを飲んだ時のことが忘れられない。「ああ、これがスイスカ。」土地そのものであった。それ以来、今まで訪れた国をはじめ、様々な国のワインを日々楽しんでる。

涙を浮かべるようなものや、自分と似ているようなもの、エスニックなものやいけ好かない物まで含めて、様々なものに出会った。美術との出会いに近い心の動かされ方をするのは、人の手が介在しているからであろうか。いけばなに近いものを強く感じる。

この器は家元副家元と行ったワイン発祥の地、ジョージアの古物市で手に入れたカンツイと呼ばれる酒杯。動物の角でできている。友情や団結を示すために大切なもので、乾杯が特に重要な瞬間らしい。まもなく収穫を思わせる季節の花になった。

